

徳島市埋蔵文化財発掘調査概要19

2009. 3

徳島市教育委員会

徳島市埋蔵文化財発掘調査概要19

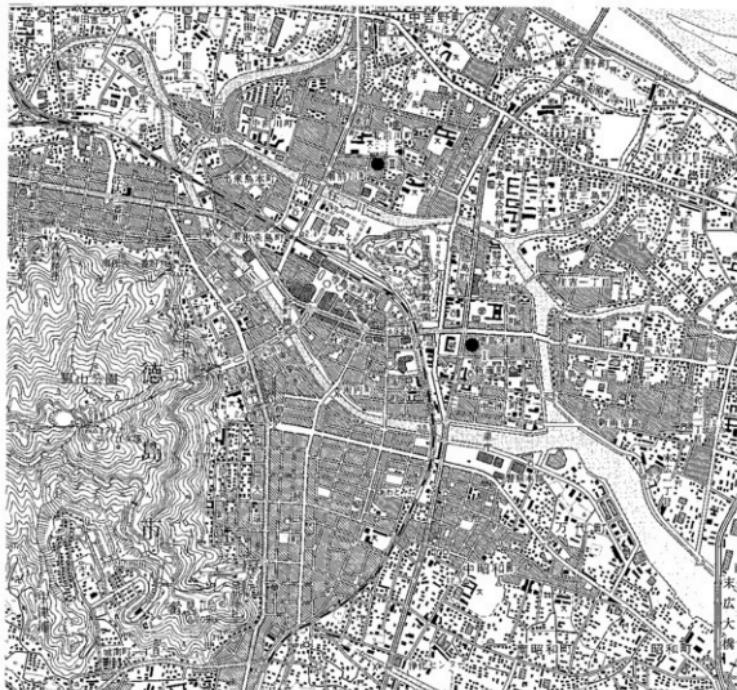
2009. 3

徳島市教育委員会

例　　言

- 1 本書は、平成16・17年度に実施した2遺跡2件の発掘調査概要報告書である。
- 2 報告書作成の費用は、徳島市教育委員会の負担による。
- 3 発掘調査は、徳島市教育委員会社会教育課勝浦康守が行った。
- 4 本書の編集・執筆は勝浦が行った。
- 5 木器の保存処理は、株式会社京都科学に委託した。
- 6 遺構写真・遺物写真的撮影は、勝浦が行った。
- 7 発掘調査で得られた遺物、その他の資料は、すべて徳島市教育委員会が保管している。
- 9 本書の作成に係る作業には、調査補助員及び作業員諸氏の協力を得た。記して感謝の意を表する。

阿部喜美代 宮浦京子 折野絵美 露口啓子 佐伯俊裕 中野勝美 市川欣也 中西洋子



調査位置図（国土地理院発行 1/50,000「徳島」「川島」縮尺使用）

I 徳島城跡 II 徳島城下町跡（前川）

本文目次

I 徳島悠構跡	
1 遺跡の立地と歴史的環境	1
2 調査に至る経緯と経過	1
3 基本層序	3
4 調査の概要	6
(1) 溝 SD01	6
(2) 溝 SD02	6
(3) 溝 SD03	6
(4) 溝 SD04・05	6
(5) 土塼 SK01	7
(6) 石積遺構 SN01	8
(7) 不明遺構 SX01	8
5 小結	9
II 徳島城下町跡（前川）	
1 遺跡の立地と歴史的環境	11
2 調査に至る経緯と経過	11
3 調査の結果	
(1) I 区の調査	11
① 基本層序	13
② 遺構と遺物	
i) 溝 SD101	13
ii) 溝 SD102	15
iii) 溝 SD103	15
iv) 溝 SD104	15
v) 溝 SD105	16
vi) 土塼 SK101・102	17
vii) 土塼 SK103・104	19
viii) 土塼 SK105	19
ix) 井戸 SE101～103	21
(2) II 区の調査	26
① 基本層序	27
② 遺構と遺物	
i) 溝 SD201	27
ii) 溝 SD202	27
iii) 石積基壇 SN201～206	27
iv) 土塼 SK201	29
v) 土塼 SK202	29
vi) 土塼 SK203	29
vii) 土塼 SK204	29
viii) 土塼 SK205	31
ix) 土塼 SK206	31
x) 土塼 SK207	34
xi) 土塼 SK208	34
xii) 整地落込 SX201	34
xiii) 庭状遺構 SX202	34
(3) III 区の調査	
① 基本層序	36
② 遺構と遺物	
i) 土塼 SK301	36
ii) 土塼 SK302	40
iii) 土塼 SK303	40
iv) 井戸 SE301～303	41
v) 溝 SD301	42
vi) 溝 SD302	43
vii) 石積基壇 SN301	43
4 小結	46
図版目次	
挿図目次	

図版目次

I 德島城跡

- 図版1 上層検出遺構
図版2 下層検出遺構
図版3 上：溝 SD01
中：溝 SD02
下：溝 SD03
図版4 上：石積 SN01
中：石積 SN01
下：下層遺構検出状況

- 図版5 上：下層検出遺構
中：堆積土層
下：石積 SN01除去後坑
図版6 整地土層出土遺物
図版7 整地土層出土遺物
図版8 整地土層(39~51)、溝 SD01(52)、SD02(53)、
SD03(54~56)、SD04(57・59・61)出土遺物
図版9 溝 SD04(58・60)、土壙 SK01(62~75)、
不明遺構 SX01(76~94)出土遺物
図版10 不明遺構 SX01(95~106)出土遺物

II 德島城下町跡（前川）

- 図版1 上：I区検出遺構
下：I区検出遺構
図版2 上：I区検出遺構
下：I区検出遺構（後方に徳島城跡）
図版3 上：I区検出遺構
中：I区検出遺構
下：I区土壙 SK101
図版4 上：I区井戸 SE101
中：I区井戸 SE101底板
下：I区井戸 SE101導水管接続部
図版5 上：I区導水管支持材a
中：I区導水管支持材b
下：I区導水管支持材c
図版6 上：II区検出遺構
下：II区検出遺構
図版7 上：II区石積基壇 SN203~206
中：II区庭状遺構 SX202
下：II区庭状遺構 SX202
図版8 上：II区石積基壇 SN201・202
下：II区石積基壇 SN201
図版9 上：II区土壙 SK204
中：II区土壙 SK205
下：II区土壙 SK206
図版10 上：II区土壙 SK208
下：II区溝 SD201
図版11 上：II区西部検出遺構
下：II区西部検出遺構（現在の境界と屋敷界
付近）
図版12 上：III区井戸 SE301

- 中：III区井戸 SE301
下：III区井戸 SE302
図版13 上：III区中央部検出遺構
下：III区溝 SD303（現在の境界と屋敷界付
近）
図版14 上：III区東部検出遺構
中：III区井戸 SE303
下：III区井戸 SE303
図版15 上：III区井戸 SE303
中：III区井戸 SE303
下：III区井戸 SE303
図版16 I区溝 SD101(1~30)、SD102(31~41)
出土遺物
図版17 I区溝 SD102(42~53)、SD103(54~80)
出土遺物
図版18 I区溝 SD104(81~95)、SD105(96~110)
出土遺物
図版19 I区溝 SD105出土遺物
図版20 I区土壙 SK101(112~123)、SK102(124~
137)出土遺物
図版21 I区土壙 SK102出土遺物
図版22 I区土壙 SK103(141~146・149)、SK104
(147・148・150・151)、SK105(152~162)
出土遺物
図版23 I区土壙 SK105出土遺物
図版24 I区土壙 SK105出土遺物
図版25 I区土壙 SK105出土遺物
図版26 I区土壙 SK105出土遺物
図版27 I区土壙 SK105出土遺物
図版28 I区土壙 SK105出土遺物
図版29 I区土壙 SK105出土遺物

- 図版30 I 区土壙 SK105出土遺物
- 図版31 II 区土壙 SK201 (278~286)、SK202 (287~290)、SK203 (291)、SK204 (292~301) 出土遺物
- 図版32 II 区土壙 SK203 (308)、SK204 (302~307) 出土遺物
- 図版33 II 区庭状遺構 SX202
- 図版34 II 区土壙 SK205出土遺物
- 図版35 II 区土壙 SK205出土遺物
- 図版36 II 区土壙 SK205出土遺物
- 図版37 II 区土壙 SK205 (352~353)、SK206 (355~371) 出土遺物
- 図版38 II 区土壙 SK206出土遺物
- 図版39 II 区土壙 SK207出土遺物
- 図版40 II 区整地落込 SX201 (381~396)、III 区土壙 SK301 (397~408) 出土遺物
- 図版41 III 区土壙 SK301出土遺物
- 図版42 III 区土壙 SK301出土遺物
- 図版43 III 区土壙 SK301出土遺物
- 図版44 III 区土壙 SK301出土遺物
- 図版45 III 区土壙 SK302 (452~464)、SK303 (465~473) 出土遺物
- 図版46 III 区井戸 SE301 (474~478)、SE302 (487~491)、SE303 (479~486) 出土遺物
- 図版47 III 区井戸 SE302 (492~494)、溝 SD301 (495~510)
- 図版48 III 区溝 SD301出土遺物
- 図版49 III 区溝 SD301出土遺物
- 図版50 III 区溝 SD301出土遺物

挿 図 目 次

I 徳島城構跡

- 図1 調査地の位置と周辺（安政年間）
- 図2 (左) 調査地と絵図（安政年間 S=1:5,000）
(右) 調査地概略図
- 図3 遺構配置図・堆積土層図

II 徳島城下町跡（前川）

- 図1 調査地の位置と周辺（安政年間 S=1:5,000）
- 図2 調査地概略図
- 図3 溝 SD101出土遺物
- 図4 I 区遺構配置図・断面土層図
- 図5 溝 SD102出土遺物
- 図6 溝 SD103出土遺物
- 図7 溝 SD104出土遺物
- 図8 溝 SD105出土遺物
- 図9 土壙 SK101(112~123)、SK102(124~140) 出土遺物
- 図10 土壙 SK103(141~146・149)、SK104(147~148・150・151) 出土遺物
- 図11 土壙 SK105出土遺物
- 図12 土壙 SK105出土遺物
- 図13 土壙 SK105出土遺物
- 図14 土壙 SK105出土遺物

- 図4 整地土壙出土遺物
- 図5 溝 SD01 (52)、SD02 (53)、SD03 (54~56)、SD04 (57~61) 出土遺物
- 図6 土壙 SK01出土遺物
- 図7 不明遺構 SX01出土遺物

- 図15 II 区遺構配置図・断面土層図
- 図16 土壙 SK201 (278~286)、SK202 (287~290)、SK203 (291~308)、SK204 (292~307)、庭状遺構 SX202 (309) 出土遺物
- 図17 土壙 SK205出土遺物
- 図18 土壙 SK205出土遺物
- 図19 土壙 SK206 (355~372)、SK207 (373~380)、整地落込 SX201 (381~396) 出土遺物
- 図20 III 区遺構配置図・断面土層図
- 図21 土壙 SK301出土遺物
- 図22 土壙 SK301出土遺物
- 図23 土壙 SK302 (452~464)、SK303 (465~473) 出土遺物
- 図24 井戸 SE301 (474~478)、SE302 (487~494)、SE303 (479~486) 出土遺物
- 図25 溝 SD301出土遺物
- 図26 溝 SD301出土遺物

報告書抄録

ふりがな	とくしましまいぞうぶんかざいはっくつちょうさがいよう							
書名	徳島市埋蔵文化財発掘調査概要							
副書名								
巻次	19							
シリーズ名								
シリーズ番号								
編著者名	勝浦康守							
編集機関	徳島市教育委員会							
所在地	〒770-8571 徳島市幸町2丁目5番地 Tel. 088-621-5418							
発行年月日	西暦 2009年3月31日							
ふりがな 所収遺跡名	ふりがな 所 在 地	コ ー ド 市町村	北 緯 緯度	東 經 経度	調査期間	調査面積 m ²	調査原因	
とくしまそうわくあと 徳島惣構跡	とくしま県徳島市 とくしま 徳島町	36201	—	34度 4分 15秒	134度 33分 29秒	20050509～ 20050617	60	会館建設工事 に伴う事前調査
とくしまこうさくまち 徳島城下町跡 (前川)	とくしま県徳島市 なかまえがわいち 中前川町	36201	—	34度 4分 45秒	134度 33分 12秒	20040601～ 20041228	850	道路築造工事 に伴う事前調査
所収遺跡名	種 別	主 な 時 代	主 な 遺 構	主 な 遺 物	特 記 事 項			
徳島惣構跡	城下町跡	近世	石組溝、土壙	陶磁器、木製品 金属器				
徳島城下町跡 (前川)	城下町跡	近世	溝、土壙、井戸 石積基壇、庭状 遺構	陶磁器、木製品 金属器、石製品				

I 徳島惣構跡

1 遺跡の立地と歴史的環境（図1・2）

天正13（1585）年、阿波国の領主となった蜂須賀家政は居城を徳島城に定めるとともに城下町の建設を始める。徳島城下町の特徴は、徳島城が築かれた標高61mを測る城山が位置する「徳島」を中心とした旧吉野川下流域のデルタ地帯の島状微高地を利用した島普請である。

徳島惣構跡は徳島城が築かれた「徳島」を指し、北は旧助任川、南は旧寺島川、東は旧福島川に囲まれ、西は西之丸に石垣を築き御花畠と界する。東は石垣と堀で城内と武家地を分ける。今回の調査地は、徳島城の東側の堀に隣接する地域で、徳島城建設とともに武家地として整備されている。

なお、徳島城築城以前には、1385（元中2・至徳2）年の細川頼之の潤津城（潤山城）が城山山上にあったとされ、1582（天正10）年、長宗我部元親の侵攻の経緯がある。ただ、蜂須賀入府以前の中世における城山周辺での考古学的な立場からの言及については、これまでなされていなかった。

城山山下にあたる徳島惣構跡の1999（平成11）年の調査¹⁰は、蜂須賀入府以前の中世の遺構や遺物が初めて確認された事例である。旧吉野川下流域の低湿地帯でありながら、徳島城内～徳島惣構跡の一部に広がる城山南東部の小範囲の地域には、自然河川による良好なシルト層の堆積がみられる。自然が形成したこの地域では異例な好環境が中世の段階から活用されおり、徳島城や城下町の建設においても充分な礎であったと考えられる。

徳島惣構跡は、寺島・福島など周辺の城下町と同様に武家地としても整備され、特にこの地域には、稻田雅楽（1500石）・坂部主税（700石）・中村主馬助（2000石）・蜂須賀山城（1300石）・池田登（5000石）・蜂須賀隼人（1300石）・蜂須賀朝負（700石）ら徳島藩家老・中老職に就いた藩士の屋敷が数多く置かれ、徳島城を中心に展開する城下町の中で最も要衝の地とされる。

調査地は徳島城鶴の門から福島橋に至る徳島本町の南に位置し、天明年間（1781～1789）の「徳島絵図」では長谷川近江（長谷川家8代・家老職・5000石）と森甚太夫（森家8代・船手頭・中老職・1016石5斗）の屋敷界付近にあたる。ただ、安政年間（1854～1860）の「御山下島分絵図・徳島」では、森屋敷に変動はないが、長谷川屋敷には池田登（池田家10代・家老職・10000石）の名前がみられることから屋敷替が行われている。『徳島藩土譜』によると長谷川については、寛政12（1800）年12月5日、長谷川越前（9代）の不祥事により屋敷は没収され、文化14（1817）年8月14日に池田屋敷に替えられた記載があることから、屋敷替以降、幕末まで池田屋敷が存続する。

2 調査に至る経緯と経過（図2）

今回の調査は、弁護士会館建設工事に伴う事前の発掘調査である。試掘調査では遺跡の残存状況は良好であったが、工事対象地には前建物（RC5F）のコンクリート杭の基礎構造物が存在していたことから、埋蔵文化財への影響は非常に大きいものと考えられた。当初、工事対象地の北側1/2を対象に調査を開始したが、重機掘削時に前建物の地下構造物が予想していた規模より大きなものが判明したため、前建物のコンクリート基礎をかわし調査を実施した。



図1 調査地の位置と周辺（安政年間）

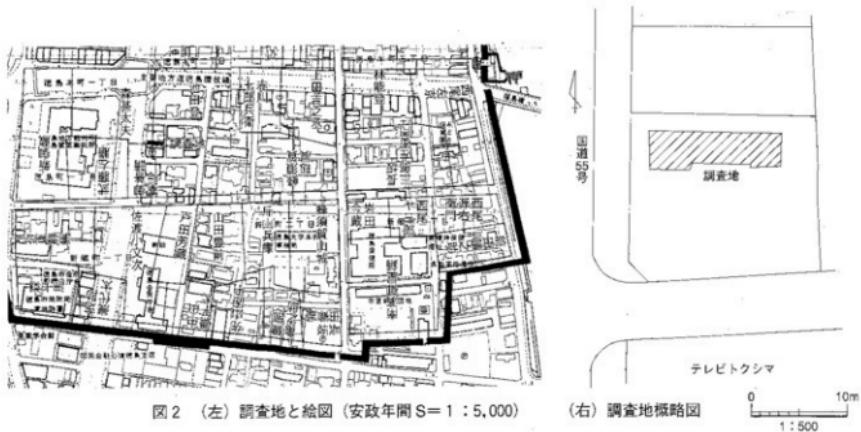


図2 (左) 調査地と絵図（安政年間 S=1:5,000）

(右) 調査地概略図

0 10m
1:500

3 基本層序（図3）

調査地周辺の現地表面は標高 T.P.+1.6mを測る。現代盛土層及び搅乱土層下に第1～6層が堆積する。以下、上位より概略する。

第0層：現代盛土及び搅乱土層

第1層：層厚40cmを測る灰白色～黄褐色砂礫混じりシルトの整地土であり、下底面に橙色粘土質シルト（赤土）を敷く所がある。

第2層：層厚20cmを測る橙色砂礫混じりシルトの整地土である。

第3層：層厚30～40cmを測る灰黄色～灰オリーブ色砂質シルトの整地土である。

第4層：層厚20～30cmを測る灰色砂礫混じりシルトの整地土である（上層遺構検出面）。

第5層：層厚20cmを測る明緑灰色細砂～シルトの整地土である。

第6層：浅黄色～明緑灰色シルトの遺構検出ベース層であり、下位では灰白色細砂混じりシルトへ変化する（下層遺構検出面）。

第1～5層は屋敷内で整地が行われる際に使用された土砂である。溝状凹地のように遺構埋土の沈下が想定されるような所には、整地を施す前に赤土を敷きつめる措置がとられるなど、必要に応じて異なる種類の土砂が使い分けられたと考えられる。

第6層のシルト層の堆積は、徳島城下町跡においては城山南東の比較的限定された小地域でみられ、この地域における良好な河成堆積を示すものである。

なお、第3・4層整地土から、肥前系磁器小壺1・碗2・壺4～6・皿10～15・香炉33・壺34・鉢35、肥前系陶器碗3・壺7・產地不明陶器蓋8・9・土師質皿16～32、備前水注36・擂鉢39・40、焼塙壺37・38、秉燭41、煙管雁首42・吸口43、鉄砲玉44、水滴45、ガラス玉46、土鉢47、碁石48、加工円盤49～51がある（図4、図版6～8）。

1は白磁、2は染付で外面に一重網目文、3は呉器手で黄白色の軟質胎土に灰釉をかける。4は内外面に灰釉、高台無釉で外面に陰刻の篆文、5・6は染付、7は底部回転糸切り痕、底部に窯道具の当て具の痕跡がある。8・9は急須の蓋で共に外面に鉄釉、内面無釉、底部は回転糸切り痕、口縁部内面に重ね焼き痕がある。10は染付で口縁部内面にヘラ彫り文である。11は染付で輪花型打成形の口銘である。12は染付で見込みに蛇の目釉剥ぎ、見込みと疊付に離れ砂が付着している。13は青磁で見込みに蛇の目釉剥ぎ、見込みと高台内外に離れ砂が付着している。14・15は染付で、15は輪花型打成形である。16～32は底部外は回転糸切り痕、19・22～24・26・30～32は口縁部に灯芯油痕がある。33は三足を貼り付け、底部内面と高台は無釉、疊付に離れ砂、高台見込みに円錐状の削り痕と墨書きがある。34は体部外面に3条の帶線、口縁端部と疊付は無釉、肩部と高台見込みに粗い離れ砂が付着している。35は青磁で蛇の目凹形高台、重ね焼きの痕があり、内面には陰刻花文が施される。36は無釉で底部外面にヘラケズリ痕、体部外面に火捺痕がみられる。37は粘土板輪積成形、38は粘土板成形で「御塙臺師塙湊伊織」の刻印がある。39・40は口縁部内面に凸帯、口縁部外面顎下に重ね焼き痕がある。41は横渡しを上下に貫通する穴を穿つ。42・43は銅製、45は二枚貝を表現し、底部に布目痕がみられる。47は上下型合わせで紐通しの穴を穿つ。48は頁岩製、49・51は瓦素材である。

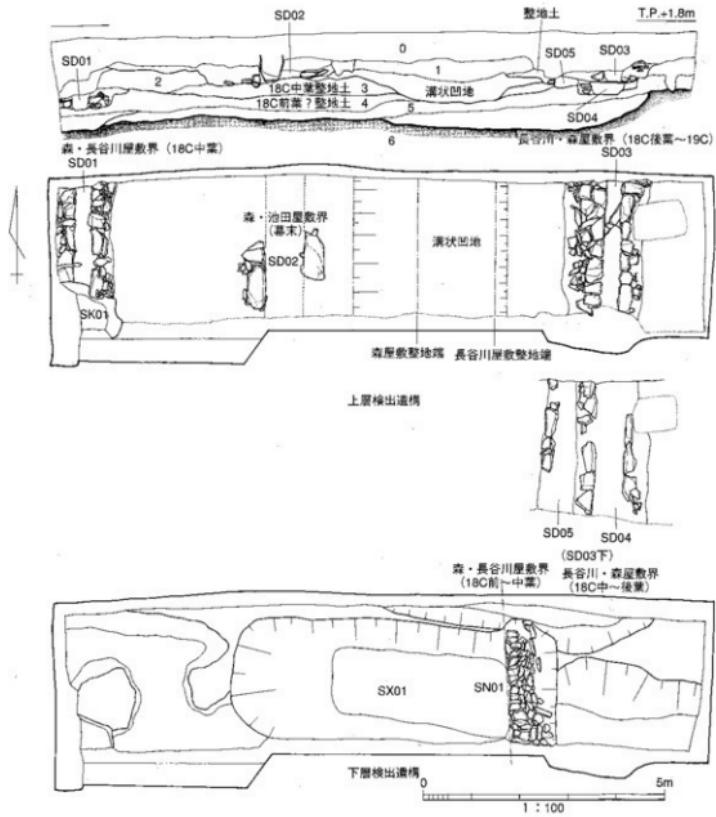


図3 遺構配置図・堆積土層図

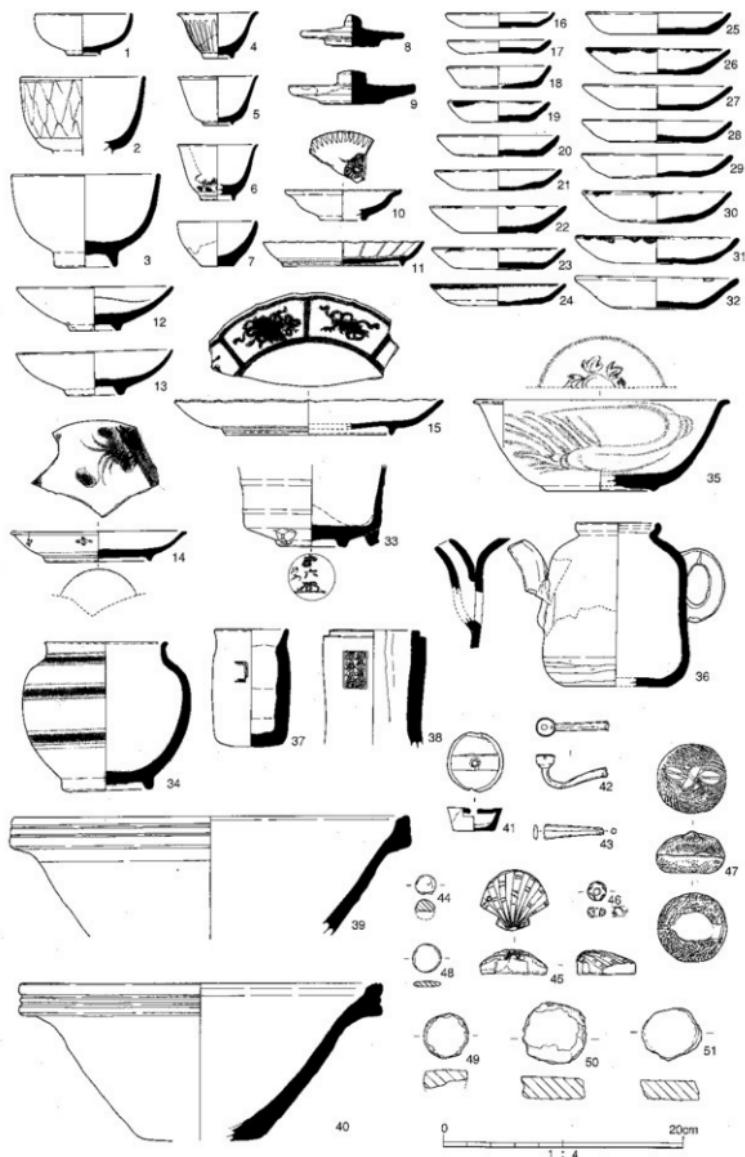


図4 整地土層出土遺物

4 調査の概要（図3、図版1・2）

調査地における整地土層の連続堆積の認定は困難であるが、概ね基本層序で示した第4～6層上面において遺構検出を行った。調査地は絵図との照合において、徳島藩士長谷川家（屋敷替後、池田家）と森家の屋敷界であることがわかる。上層検出遺構面は第4・5層の任意面であり、石組溝と土壤を確認し石組溝は屋敷界を指標する遺構として捉えられる。また、下層遺構検出面は第6層上面であり、石積遺構と不明遺構を検出している。上層で確認された石組溝との関連付けにより屋敷界の変遷過程を示す事例と考えられる。以下、主な遺構と遺物について概略する。

(1) 溝 SD01 (図3・5、図版3・8)

調査地の西端で検出した幅40cm、深さ20cmを測る石組溝であり、石材は結晶片岩の小礫を使用し間詰め石を多用する。

出土遺物には、肥前系磁器碗52がある。52は青磁染付で、口縁部内面は四方櫛文である。

(2) 溝 SD02 (図3・5、図版3・8)

SD01の東側で検出した幅80cm、深さ40cmの石組溝であるが、石組が欠落している。石材は直方体に加工された結晶片岩であり規格が大きい。また、断面観察において溝内に大甕が置かれた痕跡がある。

出土遺物には、土師質皿53がある。

(3) 溝 SD03 (図3・5、図版3・8)

調査地の東端で検出した幅30cm、深さ30cmを測る石組溝で底部には板材を敷いている。

出土遺物には、ミニチュア陶器蓋54、珉平焼皿55、大谷燒德利56がある。54は外面に灰釉、55は見込みに龍の陽刻がある。

(4) 溝 SD04・05 (図3・5、図版8・9)

溝SD03の下面で確認された溝であり、SD04はSD03下わずかに西にずれ幅60cm、深さ20cmを測り、さらに西側に位置するSD05の石組みの一部を壊している。SD04と05は溝底部に高低差があり、深度の浅いSD05の石組は除去されたと考えられる。

SD04の出土遺物には、肥前系磁器碗57・紅皿58・蓋59、土師質坏60、基石61がある。

57は染付で、外面に蛸唐草文、口縁部内面は四方櫛文である。58は外面に貝の放射脈を表した型押成形で、外面は一部無釉である。59は染付で、口縁部内面は四方櫛文である。

60は口縁部が内弯気味に立ち上がる。61は頁岩製である。

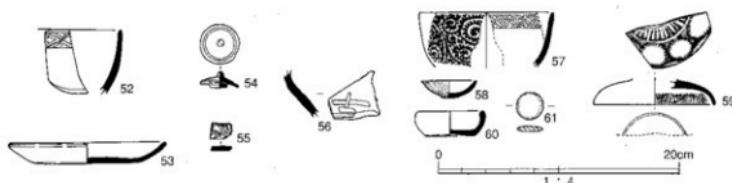


図5 溝 SD01 (52)、SD02 (53)、SD03 (54～56)、SD04 (57～61) 出土遺物

(5) 土壌 SK01 (図3・6、図版3・9)

調査地南西隅部において遺構の一部を検出し、平面形が方形もしくは長方形を呈すると推測され、深さは60cmを測る。屋敷界溝と考えられる石組溝 SD01と切り合い関係において新相である。

出土遺物には肥前系磁器小坏62・碗63・64・67・蓋69・皿71~73、產地不明陶器碗65、肥前系陶器碗66・68、備前蓋70、灯明皿74、土人形75がある。

62・63は染付で、63は口縁部内面に四方櫛文、見込みは二重圓線内にコンニャク印判の五弁花文である。64は青磁染付で、口縁部内面に四方櫛文、見込みは二重圓線内に花草文である。65は内外面灰釉で口縁部に呉須を掛け流している。

66は黄白色の硬質胎土に灰釉で、高台無釉である。67は染付の筒形碗で、口縁部内面に四方櫛文、見込みは二重圓線内に手描き五弁花文である。

68は口縁部外面～内面に鉄釉、体部外面にトビガナン装飾を施す。69は染付で「ハ」の字形高台を呈し、口縁部内面に四方櫛文、見込みは二重圓線+青海波文内に「壽」字である。70は急須の蓋で無釉である。

71は染付の輪花型打成形で口鋸、内面に陽刻文を施す。72は鉄絵皿である。73は染付で、蛇の目形高台で高台内に重ね焼き痕がある。

74は口縁部に灯芯油痕がある。75は左右型合わせ成形の馬で赤色塗彩が施されている。

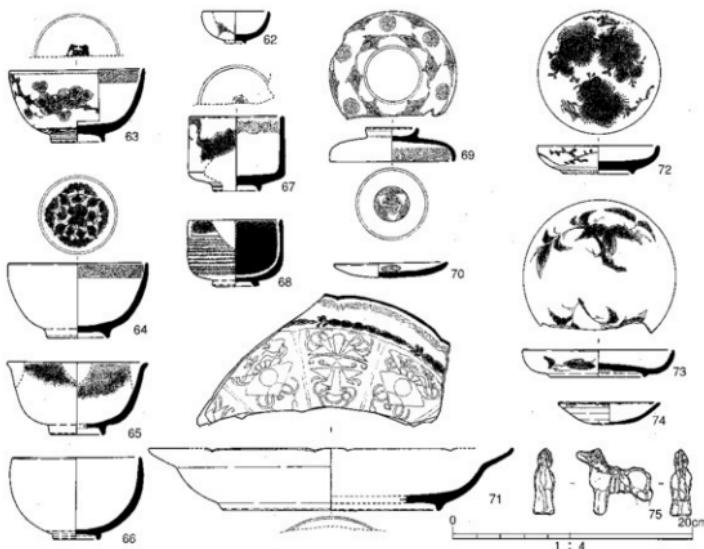


図6 土壌 SK01出土遺物

(6) 石積遺構 SN01 (図3・図版4)

溝SD05より西側へわずかにずれて位置し、不明遺構SX01の東側落込部に30~50cmの高さで築かれた石積である。石積西側に小口面をそろえる。石積除去後、木杭列を確認する。

(7) 不明遺構 SX01 (図3・7、図版4・5・9・10)

長辺7m、短辺3m、深さ60cmを測り、平面形が長方形を呈する遺構である。遺構の性格については明確でないが、屋敷界付近で掘削された大規模な土壌状の形態を呈する。

出土遺物には、肥前系陶器皿76・77、土師質皿78~98、産地不明陶器甕99、土師質鍋100、漆器椀101~103、曲物104・105、下駄106がある。

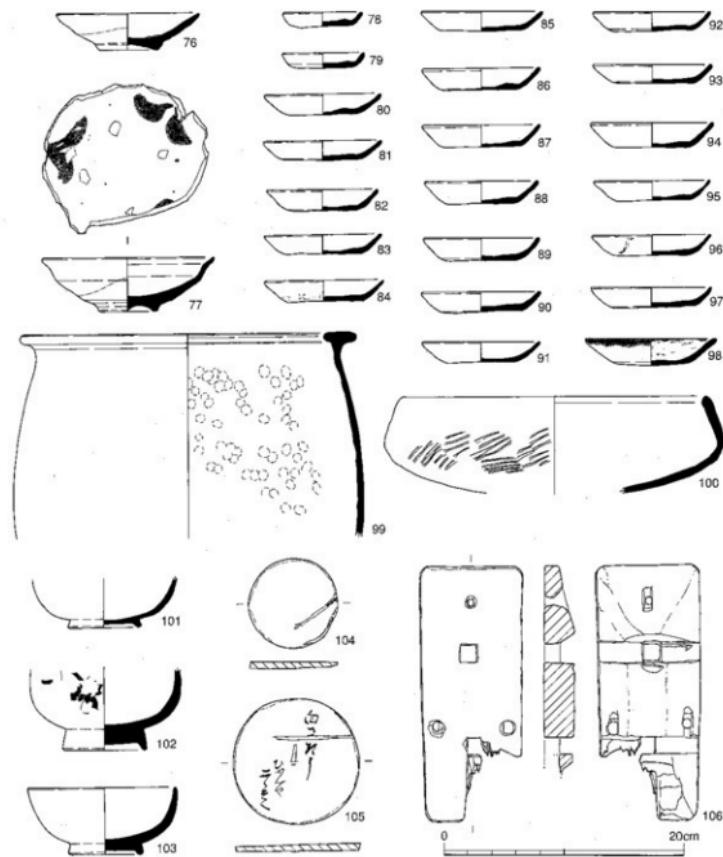


図7 不明遺構 SX01出土遺物

76は高台無釉で煤が付着、見込みに4か所の胎土目跡がある。77は口縁部が屈曲し高台無釉、内面に鉄絵、見込みに4か所の胎土目痕、高台内に円錐状のケズリ痕がある。

78～98は底部外に回転糸切り痕と簀の子状圧痕がみられる。99は口縁部を左右に拡張し、上面は平坦である。100は体部外面～底部に叩き痕、外面に煤の付着が顕著である。

101は内外面に黒色漆、102は内外面に黒色漆、外面に赤色の漆文様、103は外面に黒色漆、内面に赤色漆である。

104・105は曲物の底板で、105は墨書「白□たう ひせん 二郎□□」（意味不明）がある。

106は角型の露卯下駄で、方形のほぞ穴数は前1、後1である。

5 小結

溝 SD01～05はいずれも石組であり徳島城下町跡の中でも特に、徳島惣構跡の武家屋敷において通常にみられる造構の特徴である。これらの溝は徳島藩士森家と長谷川家（後、池田家）の屋敷界付近に存在し、また、出土遺物と断面観察から、SD01→SD05→SD04→SD03→SD02への変遷が考えられる。この場合、通常、ほぼ同位置において変遷する屋敷界溝が時間的経過において若干、移動していることになる。

この屋敷界溝の移動を考える一つの材料として天明年間（1783～1785）に描かれた「徳島絵図（南部）」がある。この絵図は、寛政12（1800）年の長谷川屋敷の没収以前の徳島地区の屋敷割りを描いたものであり、各屋敷主の名前に加え、屋敷表口の間数が記載されている。興味深いのは長谷川屋敷と西隣の森屋敷との間に墨筆された屋敷界から3間分長谷川屋敷に入り込んで朱筆が施されていることである。この朱筆の意味については「朱筆は各屋敷における個別の土地の交換を把握するために、藩当局が加筆したもの」との指摘がある^⑩。そこで、この絵図にみられる土地のやりとりと今回確認された石組溝の変遷との関係について試案する。

天明年間の「徳島絵図」には、上田吉之丞（間口30間）、赤川七郎兵衛（間口21間5尺）、長谷川近江（間口43間）、森甚太夫（間口43間5寸）の屋敷が描かれており、現在の地形図との照合において、この段階で墨筆されている長谷川屋敷と森屋敷の屋敷界には溝 SD01が考えられる。

次に、3間東に森屋敷が広がることを意味する朱筆であるが、SD01から3間東には屋敷界を指標する造構は存在しない。ただ、断面堆積土層の観察から SD01から3間分東に盛土による整地が行われた痕跡がある。この盛土は盛土端が長谷川屋敷に対し低傾斜していることから、森屋敷から長谷川屋敷に対して行われたと考えられる。これに対し長谷川屋敷でも盛土が行われ両屋敷の地盤がかさ上げされることにより、幅3m、深さ40cmを測る溝状の凹地が生じ、これが朱筆された屋敷界であると考えられ、この時、SD01と溝状凹地は併存する可能性がある。

溝状凹地が森と長谷川の両屋敷内での盛土による地盤上げによる結果と捉えられるが、なぜ、朱筆された位置が屋敷界として設定されたかが問題である。この問題を考える上で検討すべきが、下層において検出した不明造構 SX01とその直上に築かれた石積 SN01である。

溝状凹地が形成される以前、下層には不明造構 SX01と石積 SN01が存在する。溝状凹地が生ず

る要因となった森と長谷川両屋敷での盛土による地盤のかさ上げ時、完全に埋没していなかったSX01内に長谷川家が石積SN01を土留め用に築いたものと考えられ、この石積が長谷川家の屋敷に対する意識の表れとされる。不明遺構SX01の出土遺物は17世紀後葉の様相を示すことから、天明年間の「徳島絵図」に示される以前に、朱筆の屋敷界に関して森と長谷川の間で土地のやりとりが進められていた可能性がある。

後に、溝状凹地は整地により平坦化され、溝SD03～05が屋敷界として機能する。ところが、安政年間（1854～1860）の「御山下島分絵図・徳島」では、絵図との照合からSD05より3間西に位置する溝SD02が屋敷界となる。この西への屋敷界の戻りは、寛政12年の長谷川屋敷の没収、続く文化14（1817）年の池田屋敷への屋敷替に伴う一連の流れの中で、森家と長谷川家の間で行われた土地のやりとりが解消された結果なのかもしれない。

（註）

- (1) 徳島市教育委員会『徳島市埋蔵文化財発掘調査概要13』、1999年
- (2) 徳島市立徳島城博物館『絵図図録第二集 徳島城下とその周辺』、2001年

Ⅲ 徳島城下町跡（前川）

1 遺跡の立地と歴史的環境（図1）

天正13（1585）年、阿波国の領主となった蜂須賀家政は居城を徳島城に定めるとともに城下町の建設を始める。徳島城下町の特徴は、徳島城が築かれた標高61mを測る城山が位置する「徳島」を中心とした旧吉野川下流域のデルタ地帯の島状微高地を利用した島普請である。

今回の調査地である城下町跡・前川は、徳島城の北側、旧助任川左岸に位置する武家地である。城下町跡・前川は二重の土手で囲まれた武家地であり、正保3（1646）年の「阿波国徳島城之図」では小範囲な武家地として整備され、当初は一重の土手で囲まれていたが、17世紀中葉以降、武家地が旧助任川の川岸へ拡充する過程において、当初築かれた土手のさらに外側に新たな土手が築かれ二重の土手により屋敷地が囲まれた形態をとる。

安政年間（1854～1860）の「御山下島分絵図」では二重の土手の内側の土手には、150～400石の高取藩士である五島太兵衛・林宇兵衛・森久兵衛・長江佐蔵・中村伴助らの名前があり、蜂須賀正勝・家政と縁のある家柄の屋敷が置かれていることから、徳島城下町の建設当初から徳島城の北方を意識する上で重視された地域と考えられる。一方、17世紀中葉以降の屋敷地の拡充に伴い内側土手の外側では、格付けの低い無足や無格者の屋敷地、屋敷主のいない建屋や町人地がみられ、身分階級差による居住区の区別が明確である。

今回の調査地は内側土手の外側に位置し、安政年間の絵図では「林弥五右衛門組御鉄炮之者」のほか、「御掃除」「建屋」の記載がみられる。また、天明年間の「御山下画図」では「御鉄炮之者」、元禄4（1691）年「綱矩様御代御山下絵図」では「足軽町」、さらに、天和3（1683）年「阿波国清津城下之絵図」でも「足軽町」とされていることから、調査地周辺は鉄炮組や小卒の屋敷地として使用されていることがわかる。

徳島城下町では西富田・佐古においても身分秩序に基づいた家臣団の屋敷割が行われている。寛永18（1641）年の「西富田屋敷割之図」「佐古屋敷割之図」¹⁰⁾では、道路で囲まれた一画が短冊型に区画割りされた鉄炮組の屋敷がみられる。城下町の南方の西富田、西方の佐古、北方の前川に、それぞれ鉄炮組の屋敷地が構えられていることから、徳島城下町の三方を防御する家臣団の配置が行われたと考えられる。

2 調査に至る経緯と経過（図2）

今回の調査は、市道吉野本町常三島線築造工事に伴う事前の発掘調査である。工事計画に基づき事前の試掘調査を実施し遺跡の残存状況を把握した後、事業主体者である徳島市開発部広域道整備課と協議を行い工事対象地において調査地Ⅰ～Ⅲ区を設定した。なお、工事対象地の内、現道部及び生活道路の一部として使用している箇所については調査対象から外した。

なお、安政年間の絵図では、調査地Ⅰ区は「建屋」と「御掃除」屋敷、調査地Ⅱ・Ⅲ区は「林弥五右衛門組御鉄炮之者」屋敷に該当する。

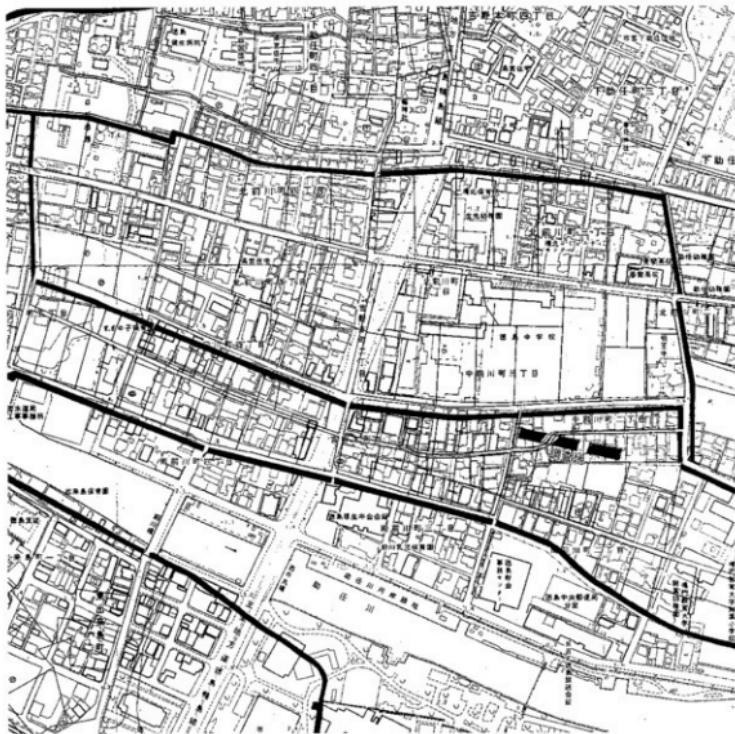


図1 調査地の位置と周辺（安政年間 S= 1 : 5,000）

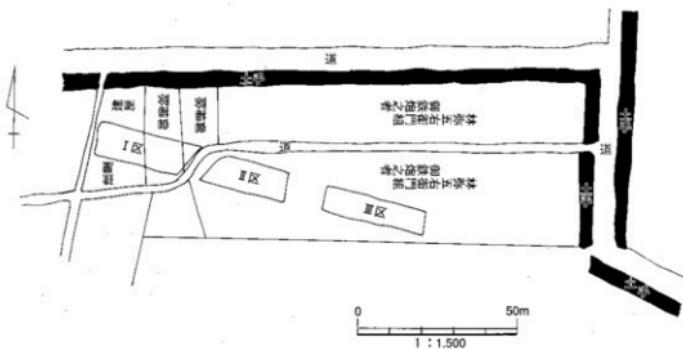


図2 調査地概略図

3 調査の結果

(1) I 区の調査 (図版 1・2)

I 区は屋敷主の明らかでない「建屋」と小卒である「御掃除」屋敷の一画に該当し、屋敷界を指標する溝や廃棄土壌、井戸、導水管施設を確認している。なお、検出遺構及び出土遺物については、良好な資料に限定し提示する。

① 基本層序 (図 4)

I 区の現地表面の標高は T.P.+1.2m を測り、現代盛土・擾乱土（0 層）下に第 1 ~ 6 層が堆積するが、調査地全域で連続堆積しない。第 1 ~ 5 層は屋敷の整地に伴う盛土で、堆積の残存が良好な箇所で層厚 60cm を測る。T.P.+40~60cm で検出される第 6 層上面が遺構検出ベース層である。

② 遺構と遺物

i) 溝 SD101 (図 2・3・4、図版 2・16)

「建屋」で検出した幅 2 ~ 2.4m、深さ 30 ~ 40cm を測る東西方向の溝である。安政年間の「御山下島分絵図」では、屋敷の界線は記載されていないが「建屋」に西接する道と南接する道に間口をとるように「建屋」の文字が 2 方向あることから、「建屋」を南北に区割りする屋敷溝とも考えられる。

出土遺物には、肥前系磁器碗 1・小壺 4・壺 5・皿 6・蓋 7~9、肥前系陶器碗 2・3、ミニチュア陶器蓋 10、産地不明陶器蓋 11・12、備前灯明皿 13・灯明受皿 14、土師質皿 15~19、加工円盤 20・21、碁石 22、火打ち石 (写真図版: 23~30) がある。18世紀後半である。

1 は白磁で疊付無釉である。2 は鉄絵を施し高台無釉、3 は半筒形碗で高台無釉である。4・5 はいずれも疊付無釉である。6 は口縁部が屈曲し高台無釉、見込みは蛇の目釉剥ぎである。

7~9 は染付の蓋物の蓋で、9 は染付で、「ハ」の字形高台である。10 は内外面に灰釉、11 は外面上に灰釉、12 は外面に鉄釉、いずれも底部外面は回転糸切り痕である。

13 は口縁部に灯芯油痕がある。14 は内面の仕切りに凹状の切り込みを入れる。15~19 の底部外面は回転糸切り痕である。20・21 は瓦素材である。22 は頁岩製、23~30 はチャートである。

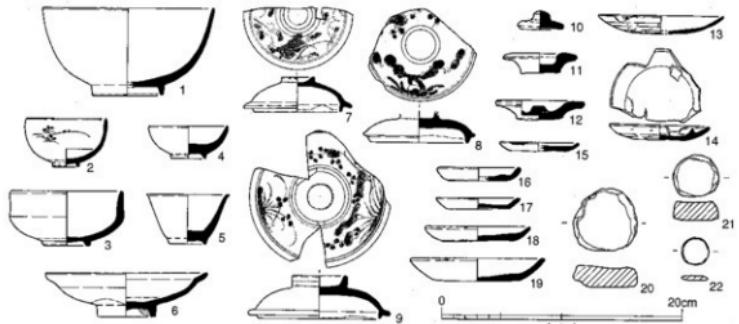


図 3 溝 SD101 出土遺物

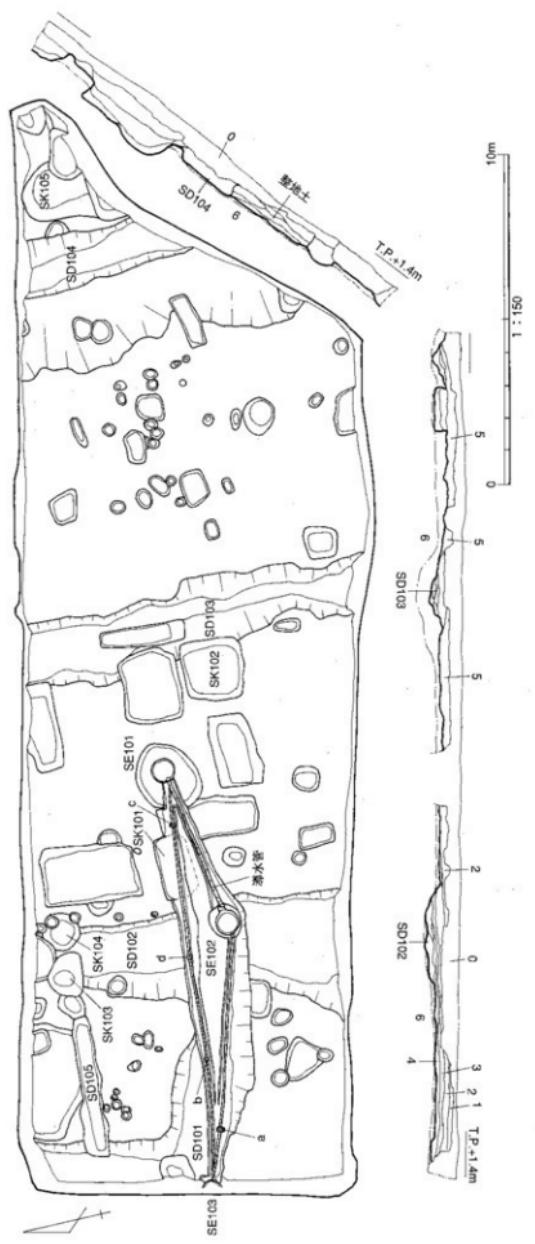


図4 1区 連携配置図・断面土層図

ii) 溝 SD102 (図4・5、図版2・16・17)

「建屋」で検出した幅1.9~2.3m、深さ25cmを測る南北方向の溝である。溝SD01同様に「建屋」内を区画する溝とも考えられるが明確ではない。

出土遺物には肥前系磁器小坏31・碗34・仏飯器35、肥前系陶器碗32・33、備前灯明皿36・37、京信楽系灯明受皿38、ミニチュア土師質鉢39・擂鉢40、土人形41・42、土鈴43、加工円盤44~49、基石50、火打ち石（写真図版：51~53）がある。18世紀後半である。

31は染付で外面に笹文である。32は外面に筆による白泥の斜格子文、内面は白泥の刷毛目文で見込みは白泥の花文である。33は口縁部外面に四方擗文、疊付に離れ砂が付着している。34は高台無袖で、見込みに3か所のハリ目跡がある。

35は底部外面に墨書（判読不明）である。38は外面無釉で、内面仕切りに凹状の切り込みを入れる。40は内外面に褐色釉を掛け指目を入れる。41は馬に乗る人物像、左右型合わせで底部からの竹串穴がある。42は馬で左右型合わせで馬の腹部下からの竹串穴がある。43は左右型合わせの鼠で、底部からの竹串穴がある。44~49は瓦素材である。50は頁岩製、51~53はチャートである。

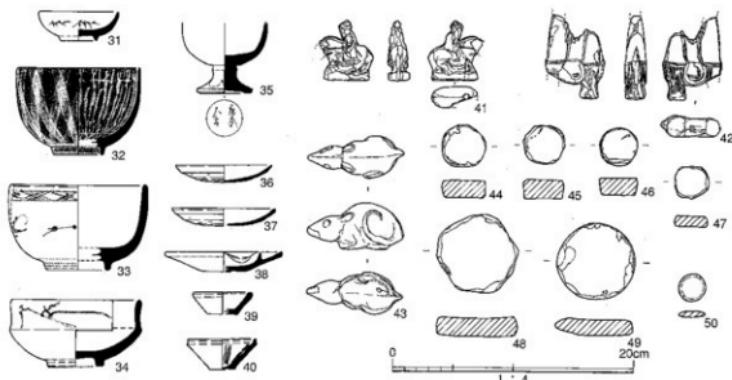


図5 溝 SD102出土遺物

iii) 溝 SD103 (図3・6、図版3・17)

幅1.1~2.2m、深さ25cmを測る南北方向の溝で、安政年間の「御山下島分絵図」から「建屋」と「御掃除」間に位置する屋敷界溝と考えられる。

出土遺物には肥前系磁器碗54・坏55・56・蓋57・皿59、土師質皿60、備前灯明受皿61、肥前系陶器鉢62、土人形63~66、泥面子67~71、加工円盤72~80がある。18世紀後半である。

54は染付で、疊付に離れ砂が付着している。55は赤絵、56は底部から直立する口縁部をもつ。

57は染付で、口縁部内面に四方擗文、見込みは二重圈線内手書き五弁花文、58は黄橙色の硬質胎土の内外面に褐色釉を施す。

59は染付で見込みにコンニャク印判の五弁花文、底部外面に渦福、墨付に離れ砂が付着している。60は土師質胎土の内外面に灰釉、高台内にケズリによる同心円状の浅い凹部が生じている。見込みに重ね焼き痕がある。

61は内面の仕切りに凹状の切り込みを入れる。62は三島手で、橙色の硬質胎土の外面に白泥を掛け流し内面は白泥による象嵌を施す。

63・64は前後型合わせの人物像で、63は底部から棒串の穴、64は竹串の穴がある。65は前後型合わせの猿の座像で、底部に棒串の穴がある。66は左右型合わせの鳥である。67~71は型押成形、72~80は瓦素材である。

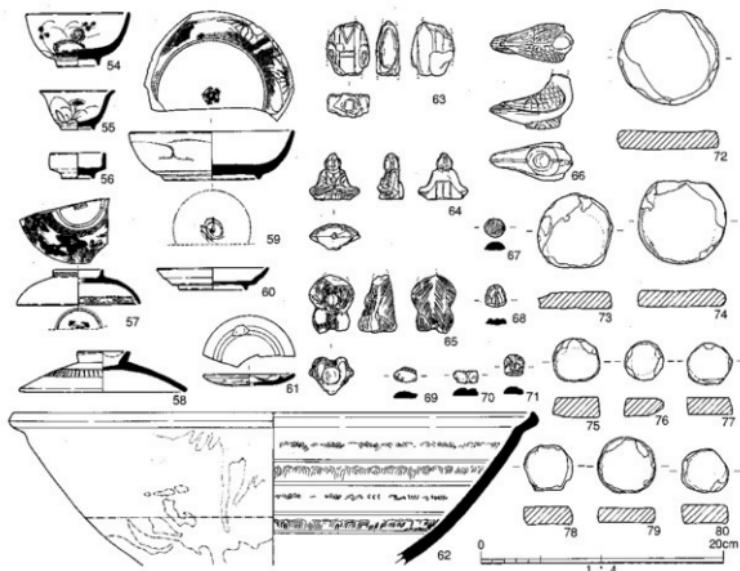


図6 溝SD103出土遺物

iv) 溝SD104(図3・7、図版3・18)

幅1.6m、深さ15cmを測る南北方向の溝で、安政年間の「御山下島分絵図」では「建屋」の東に連続する2区画の「御掃除」屋敷の間に位置することから屋敷界溝と考えられる。

出土遺物には、肥前系磁器碗81・小壺85・壺86・87・皿88、肥前系陶器碗82~84・皿89、備前灯明受皿90、産地不明陶器灰落し91・水注92、泥面子93、加工円盤94、石製品95がある。18世紀中葉である。

81は染付で二重網目文である。82は陶胎染付である。83は口縁部外面~内面に灰釉、体部外面は

褐色釉のトビガンナ装飾、见込みに1か所ハリ目迹が残り、幅広の疊付で無釉である。

84は内外面に灰釉、高台無釉である。

85は疊付無釉、86・87は疊付に離れ砂が付着している。

88は染付、89は内外面に鉄釉、高台無釉で、见込みは蛇の目釉剥ぎである。91は褐色の硬質胎土で無釉である。92は黒褐色釉で疊付に離れ砂が付着、内面無釉である。

93は型押成形、94は瓦素材、95は結晶片岩で棒柱状の中央に溝状の抉りを巡らす。

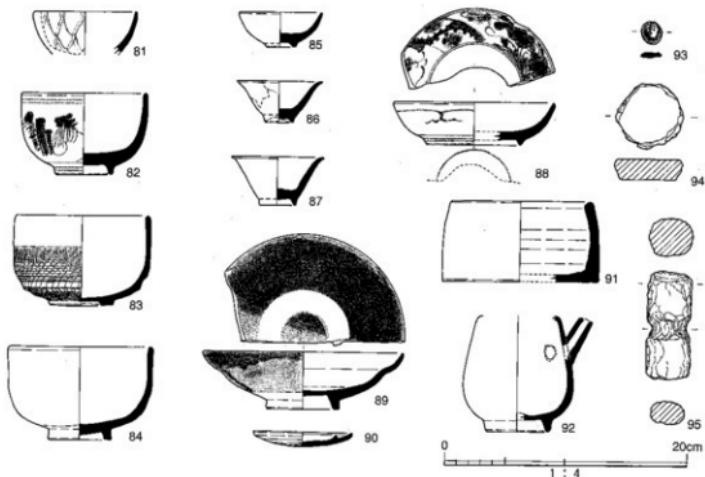


図7 溝SD104出土遺物

v) 溝SD105 (図3・8、図版2・18・19)

「建屋」の屋敷で確認した、幅60cm、長さ4.2m、深さ35~40cmを測る両端が収束する東西方向の溝状造構である。

出土遺物には、大谷焼碗96、瓶109、肥前系磁器坏97・99、碗98、蓋101・102、皿105、產地不明陶器坏100、蓋103、皿106、鉢110、ミニチュア土師質坏104、京信楽系灯明皿107、備前灯明受皿108、肥前陶器鉢111がある。19世紀代である。

96は内外面に鉄釉、高台無釉で、見込みに2か所ハリ目跡が残る。

97~99は染付で、疊付無釉である。

100は灰白色の硬質胎土に灰釉、底部及び体部内面は無釉である。

101・102は染付で、102は端反で見込みに鳥を描く。103は橙色の軟質胎土で内面に灰釉、外側無釉で底部外側は回転糸切り痕である。

105は染付で、見込みは二重圈線内にコンニャク印判の五弁花文、高台内は一重圈線内渦福、疊付無釉で離れ砂が付着している。

106は黄白色の硬質胎土に灰釉をかけ、口縁部は屈曲、底部無釉で、見込みは蛇の目釉剥ぎである。107は灰白色の硬質胎土に灰釉をかけ、外面は無釉、見込みに1か所のハリ目跡が残り、内面に2方向の3条沈線、口縁部外面に灯芯油痕がある。

108は内面の仕切りに凹状の切り込みを入れる。

109は体部外面に鉄釉、底部外面無釉で、体部外面上位にカキ目を施す。110は黄橙色の硬質胎土で口縁部を左右に拡張し、端部は平坦である。

111は褐色の胎土で、口縁部は屈曲し体部外面に鉄釉、内面は白泥の刷毛目に鉄釉を掛け流し、見込みに2か所のハリ目跡が残る。

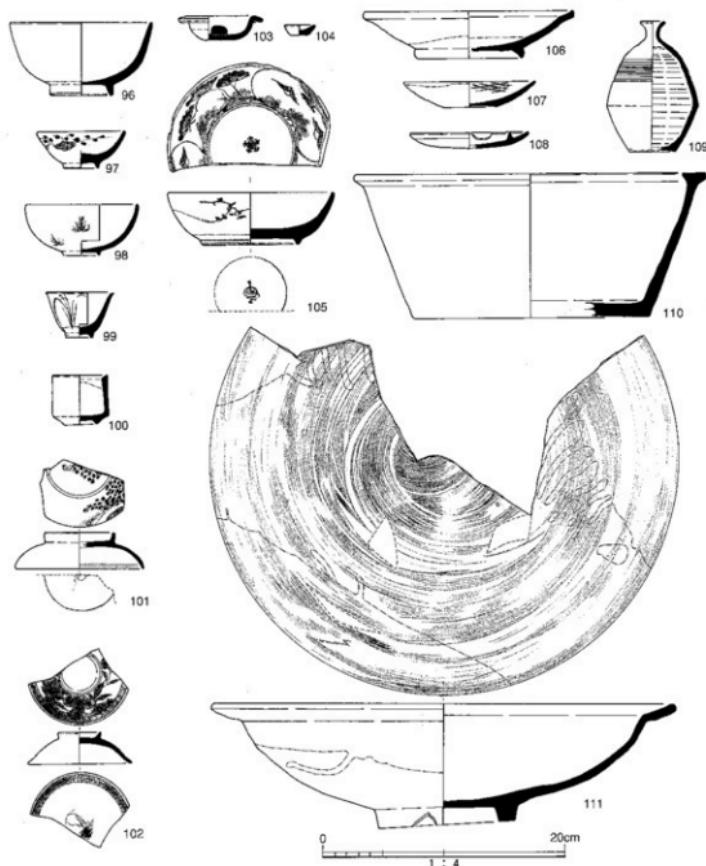


図8 溝SD105出土遺物

vi) 土壙 SK101・102 (図3・9、図版3・20・21)

「建屋」の屋敷に伴う廃棄土壙と考えられ、SK01は長辺2m、短辺1mの平面形が長方形を呈し、深さ25cmを測り、主に大型の石材及び瓦の廃棄土壙である。また、SK02は一辺2mの平面形が方形を呈し、深さ30cmを測る。

出土遺物には、SK101より肥前系磁器碗112・113、瀬戸美濃系磁器蓋114・115、土師質皿116、ミニチュア陶器蓋117、加工円盤118、泥面子119・120、基石121・122、產地不明陶器漫瓶123、SK102より肥前系磁器碗124～128・鉢133・蓋134～136、瀬戸美濃系磁器碗129・130、関西系磁器碗131、產地不明磁器碗132、陶器行平鍋137・鍋138、京信楽系土瓶139、堺明石系擂鉢140がある。19世紀代である。

112・113はコバルト顔料の染付で型紙刷りである。114・115は染付で、114は見込みに「大口年製」銘である。116は底部外面は回転糸切り痕である。117は外面に褐色釉、底部無釉である。118は瓦素材である。119・120は型押成形、121・122は頁岩製である。123は体部外面～内面に鉄釉、底部外面は無釉である。

124は白磁、125・126は染付で、125は口縁部内面に四方棒文、見込みは一重圓線内「壽」字、126は口縁部内面に雷文、見込みは一重圓線内に簡略化した松竹梅文である。127は白磁、128は染付で高台内に「□□精製」、129・130は端反の染付、131は染付で口縁部内面に四方棒文、見込みは二重圓線内に花文、132は色絵で口紅、高台内に「九谷」銘がある。

133は染付で輪花型打成形、口縁部内面に雷文、蛇の目凹形高台で高台内に透明書きの「ヌハ三」の記号がある。134・135は染付で、134は「ハ」の字形高台で、口縁部内面に四方棒文、見込みは二重圓線内に松竹梅文である。136は染付の合子の蓋である。

137は体部外面に灰釉、口縁部の蓋受と外面体部下半～底部は無釉で、底部は三足を貼付け煮汁痕がある。138は体部外面下半～内面に灰釉、底部外面は無釉、口縁部に橋状把手を貼り付け、底部外面は三足を貼り付け煮汁痕がある。139は白土鉄絵で口縁部から綠釉を掛け流し、底部外面無釉である。140は頬が張る口縁部で、口縁部内面に1条沈線が巡り、摺目の上端はナデで消し揃えられ、見込みは放射状文様である。

vii) 土壙 SK103・104 (図3・10、図版2・22)

「建屋」の屋敷に伴う土壙である。SK03は長辺1.3m、短辺1.1mの平面形が不整長円形を呈し、深さ40cmを測る。SK04は長辺1.2mの平面形が不整円形を呈し、深さ70cmを測る。

出土遺物には、SK103より京信楽系碗141・皿144、產地不明陶器蓋145、萩焼碗142、肥前系磁器皿143、瀬戸美濃系磁器御神酒徳利146、大谷焼徳利149がある。また、SK104より京信楽系土瓶147・148・皿151、肥前系磁器皿150がある。19世紀代である。

141は注連繩文碗で色絵（赤色）の注連繩と海老である。142は外面にビラ掛けが施される。143は染付で高台内無釉、144は黄白色の硬質胎土で内面に灰釉を掛け、2条沈線が入る。

145は土瓶の蓋で、黄白色の硬質胎土の内面に灰釉、橋状摘みを貼り付け、3か所の胎土目跡、底部外面は無釉で回転糸切り痕である。146は染付である。



図9 土壌SK101(112~123)、SK102(124~140)出土遺物

147は黄灰色の硬質胎土の外面に灰釉を掛け、肩～体部に白泥の打ち刷毛後に鉄絵を施し、底部外面と蓋受部～内面上位は無釉、体部内面は鉄釉である。

148は体部外面は白土色絵で、口縁部端面～内面無釉、底部外面に白泥を塗り墨書き（判読不明）がある。

149は内外面に鉄釉、高台内と体部内面無釉で、肩部に「**油助巳冬**」の印刻を施す。

150は輪花型打成形で口鏽、内面に陰刻文様を施す。151は内面に灰釉、仕切りに凹状の切り込みを入れ、底部外面無釉である。

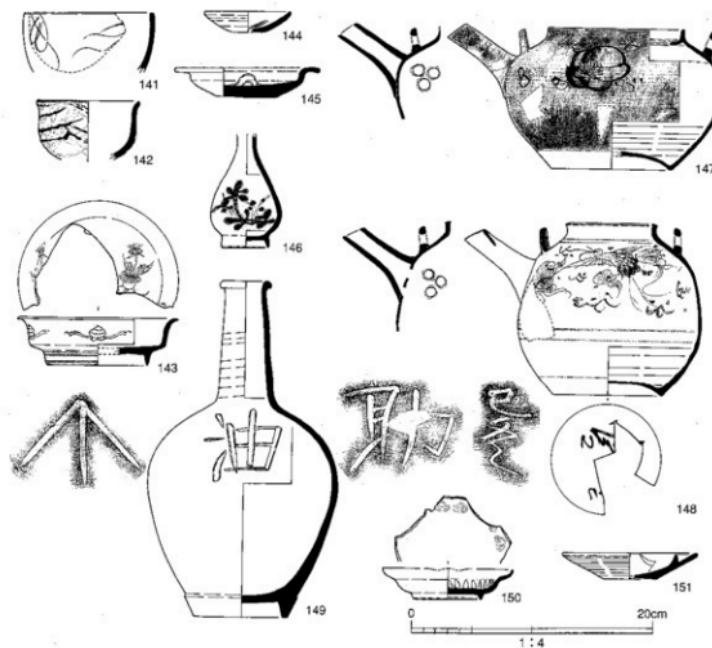


図10 土壌SK103(141~146・149)、SK104(147・148・150・151)出土遺物

vii) 土壌SK105(図3・11~14、図版3・22~30)

調査地東端の「御掃除」屋敷において検出した土壌で、隣接して遺構の切り合が重複し、調査地外へ広がるため遺構形状は明確でないが、調査地内において長径2m、短径1.7mの不整楕円形を呈し、深さ50cmを測る。SK105付近は「御掃除」屋敷の裏側に位置し、土壌が集中し切り合が多数みられる。屋敷裏におけるこのような遺構の在り方は通常的であり、廃棄行為が頻繁に繰り返された土地利用が考えられる。

出土遺物には、肥前系磁器碗152・155～157・159・160・小壺158・皿161～163・蓋物165・166・段重167・171～174・蓋168～170・鉢175、瀬戸美濃系磁器皿164・碗176～187・蓋188～191、瀬戸美濃系陶器皿195・鉢196、瓦質蓋197・201・火鉢214、產地不明陶器蓋198～200・鉢215・台付皿216～223、土師質皿202・203、備前皿204・205、灯明受皿206・壺207、京信楽系水滴210、產地不明陶器行平鍋212～213、万古燒系土瓶225・226、焰烙227、堺明石系擂鉢228～230、泥面子231～276、土人形277がある。19世紀代である。

152は染付、153・154は色絵である。155は染付で焼き継ぎ痕があり、高台内には透明書きの記号がある。156・157はコバルト顔料の型紙摺りである。158～160は染付である。

161・162は染付で、蛇の目凹形高台、162は焼き継ぎ痕がある。

163・164は染付で、163はコバルト顔料の輪花型打成形で口鋸、蛇の目凹形高台で高台内白泥、焼き継ぎ痕である。164は輪花型打成形で、焼き継ぎ痕跡があり高台凹部に透明書きの記号がある。

165～167は染付で、口縁部無釉、165・167は焼き継ぎ痕があり、高台内に透明書きの記号がある。

168は染付の蓋で、焼き継ぎ痕があり内面に透明書きの記号がある。

169は染付の合子の蓋である。170～172は型紙摺りで、170・172は焼き継ぎ痕がある。173・174は染付、174は焼き継ぎ痕があり、底部外面に透明書きの記号がある。

175は染付で輪花型打成形、蛇の目凹形高台で焼き継ぎ痕があり、高台内に朱書きの記号がある。

176～180は端反の染付で、176～178は口鋸である。179は染付、181は色絵の口鋸である。

182～185はコバルト顔料で、183～185は型紙摺り、183は焼き継ぎ痕がある。

186は見込みに「頭取 日本達」、高台内「清風」、187は見込みに「内魚町 豆」と大黒神を描く。

188は染付、189は型紙摺りである。190・191はコバルト顔料で、190は染付、191は型紙摺りである。

192は型押成形の方形皿で内面に除刻文様である。193・194はコバルト顔料で、染付である。

195は馬目皿で、見込みに5か所の胎土目跡、底部外面無釉で蛇の目高台である。

196は体部外面～内面に灰釉、底部外面は無釉、口縁部は玉縁状で見込みに5か所の離れ砂の付着痕がある。

197は土瓶の蓋、198は行平鍋の蓋で橙色の軟質胎土の内外面に灰釉、口縁部無釉、外面にカキ目を施す。199は黄白色の軟質胎土に褐釉、口縁部無釉で体部外面にカキ目を施す。

200は行平鍋の蓋で、灰色の硬質胎土で外面はトビガンナ装飾、黄褐色釉を蛇の目状に塗り白イッシュ掛け、内面は灰釉、口縁部無釉である。

201は火消壺の蓋である。202～204の底部外面は回転糸切り痕である。

205は口縁部に灯芯油痕、206は仕切りに凹状の切り込みを入れる。207は外面～口縁部内面に鉄釉、208・209は鉄釉を施し底部外面無釉である。210は内外面に灰釉、底部無釉、上面に陽刻文様を施す。

211は橙色の硬質胎土で内面は灰釉、外面は体部上位にトビガンナ装飾に鉄釉、把手と注口及び貼付部に鉄釉を塗る。体部外面下位に重ね焼き痕がある。

212は橙色の硬質胎土の内面に灰釉、外面上半にトビGANNA装飾し鉄釉を塗る。把手と注口及び貼付部に鉄釉を塗る。体部下半～底部外面は無釉である。



図11 土壌SK105出土遺物

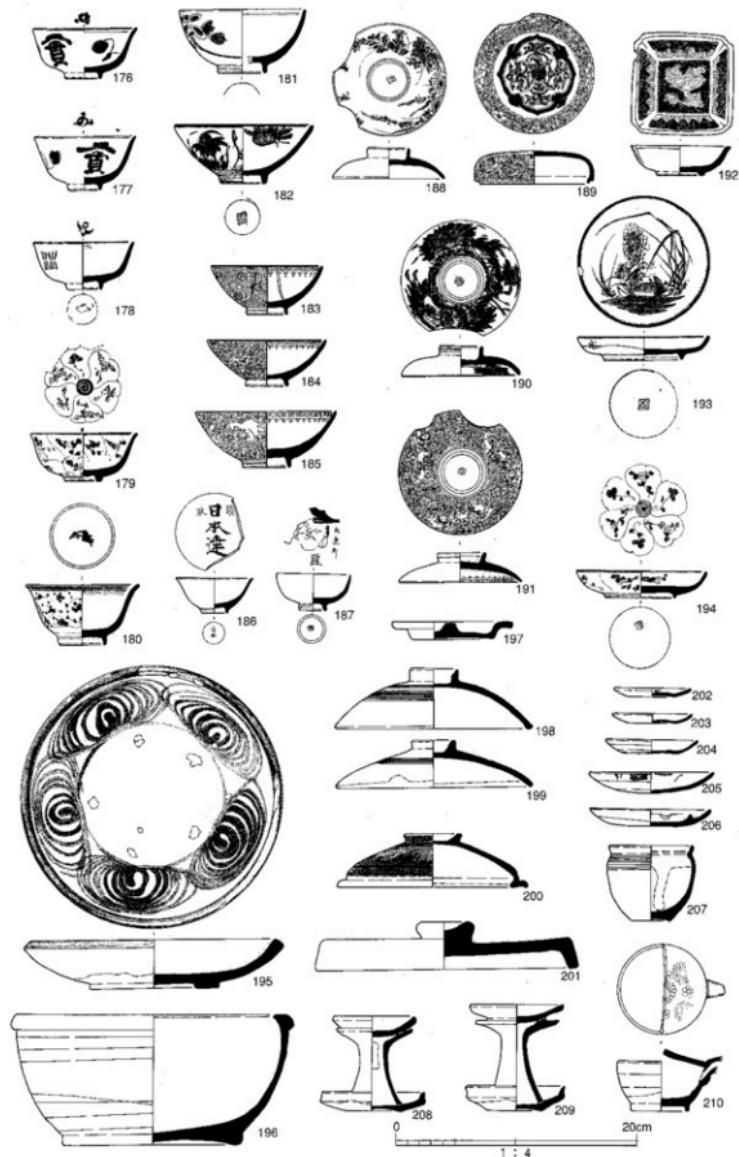


図12 土壙 SK105出土遺物

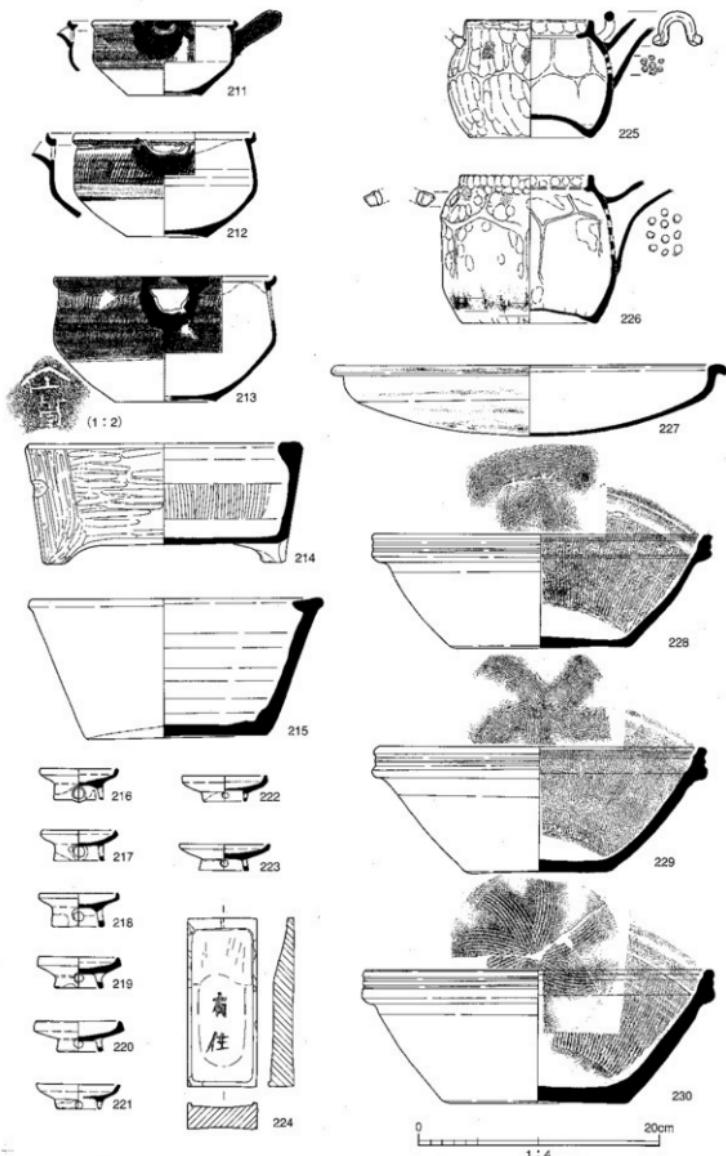


図13 土壤SK105出土遺物

213は灰色の硬質胎土の内面に灰釉、外面上半にトビガンナ装飾し鉄釉を塗る。把手と注口及び貼付部に鉄釉を塗る。

214は粘土板成形の方形火鉢で、外面に縱横位のヘラミガキ、内面にはハケが施され、口縁部上面に刻印がある。215は内外面に鉄釉、底部外面無釉である。

216～223は焼き味噌皿で、橙色の軟質胎土の内外面に柿釉を施し、高台に棒通し用の穴を2か所あける。224は粘板岩製で「有住」の刻印がある。

225は黄土色の硬質胎土、226は褐色の硬質胎土で、いずれも亀甲型の押型成形で底部外面に布目痕が残り、226は内面に薫釉で底部外面に炭化物が付着している。

227は口縁部が屈曲し、外面に煤が付着している。

228～230は口縁部内面に1条沈線、摺目上端はナデで消し揃えられる。228は見込みに不定形文様、228～230は放射状文様である。

231～276は型押成形、277は童子像で、前後型合わせの中空である。

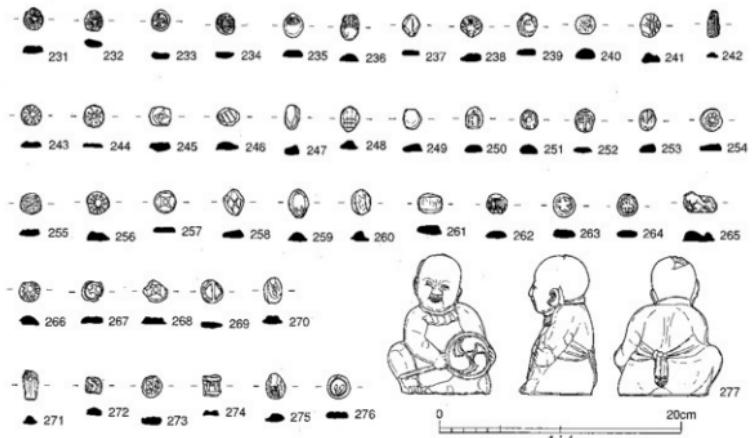


図14 土壙 SK105出土遺物

ix) 井戸 SE101～103 (図3、図版2・4・5)

「建屋」の屋敷内で検出した井戸である。SE101～103の井戸側は桶積み上げであるが、SE102の井戸側上位はセメント製土管、SE103の井戸側上位は陶製土管であることから後世の改修が考えられる。SE101の井戸側は最下位の桶積み上げが残存するが、打ち込み井戸であり井戸側の側面にSE102・103と連結する導水用の竹管が接続されている。なお、SE101～103は竹製の導水管で輪状につながっている。また、埋設された竹製の導水管には、平衡を保つための支持材(a～d)が使用されている。

(2) II区の調査（図15、図版6）

II区は徳島藩士林弥五右衛門が組頭を務める鉄炮之者の屋敷地に該当する。初代林弥五右衛門は蜂須賀家政が尾州より召し、林家は鉄炮組頭に就く家柄である。屋敷の石積基壇、井戸、廃棄土壘を確認している。なお、検出遺構及び出土遺物については、良好な資料に限定し提示する。

① 基本層序

調査地の現地表面の標高はT.P.+1.4mを測り、屋敷内における堆積土は複雑である。北側層序における基本層序は現代盛土及び擾乱土（0層）下に第1～6層が堆積する。第1・2層は屋敷内における整地土の内、島状盛土に使用される良質のシルト、3～5層は島状盛土の周囲の整地に使用された土砂である。第6層は旧助任川の河成堆積層のシルトであり、遺構検出ベース層である。

② 遺構と遺物

i) 溝 SD201（図15、図版10）

幅1.8m、深さ5～15cmを測り、屋敷表から裏にかけて深さが浅くなる南北方向の溝であり、鉄炮屋敷を短冊型に区画した屋敷界を指標する溝と考えられる。ただ、SD201は掘削に伴う溝ではなく、短冊型に区画された各屋敷の表側において部分的に行われた島状盛土に伴う高低差により、屋敷間に見かけ上、溝状を呈する凹地が生じたものである。また、溝内には遺構が集中することから、屋敷の区画割りを指標する本来の屋敷界溝としての意識はみられない。

ii) 溝 SD202（図15、図版8）

調査地の西端において検出した南北方向の溝状の落ち込みで、深さ40cmを測る。SD201・SX01から連続することから、屋敷内における島状盛土に伴い生じた落ち込みで、見かけ上、溝状を呈するが、SD201と同じく掘削に伴う落ち込みではない。

iii) 石積基壇 SN201～206（図15、図版7・8）

溝SD201の東西の屋敷地において検出した石積基壇である。SD201の西側の屋敷地では屋敷の西端で南北方向の1列1段の直線基壇（SN201）と東西方向には残存状況が極めて悪いが1列1段が残存する（SN202）。また、SD201の東側の屋敷地では屋敷内で行われた島状盛土の拡張に対応し、1～3段のL字基壇（SN204・205）と直線基壇（SN203・206）が築かれる。これらの石積基壇に使用されている石材はすべて結晶片岩である。

なお、石積基壇SN203～206が築かれたSD201の東側の屋敷では、屋敷内における島状盛土の拡張状況（整地ラインa→d）と石積基壇の増築（SN203・204→205・206）に相互関係がみられ、時間差を経て建物基壇を構築する箇所に良質のシルトと粘土を互層に叩き締めた島状の高まりが拡張する。SD201の西側の屋敷では、前述したような石積基壇と島状盛土の拡張関係がみられないことから、当初から石積基壇の構築部の広さが確保されていたと考えられる。

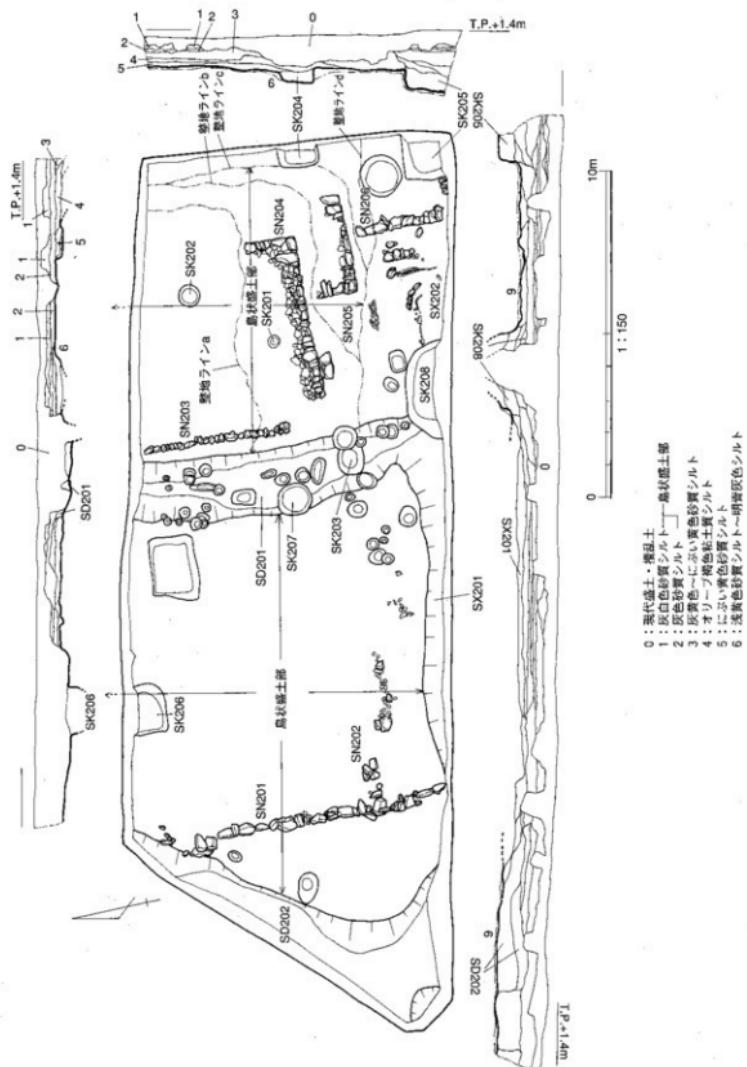


図15 II区 透構配置図・断面土層図

iv) 土壙 SK201 (図15・16、図版31)

長径70cm、短径60cmの平面形が長円形を呈し、深さ20cmを測る土壙である。

出土遺物には、肥前系陶器碗278・皿280～284・坏285・仏飯器286、瀬戸美濃系陶器碗279がある。18世紀前半である。

278は陶胎染付で壘付無釉である。279は天目碗で、灰白色の硬質胎土の内外面に鉄釉を掛け高台無釉の撥形高台、高台内が凸状を呈し墨書きがある。

280は白磁で、見込みは蛇の目釉剥ぎで離れ砂が付着、高台無釉で壘付に離れ砂が付着している。281～284は染付、284は見込みはコンニャク印判の五弁花文である。285・286は染付の型紙摺りである。

v) 土壙 SK202 (図15・16、図版31)

長径70cm、短径60cmの平面形が長円形を呈し、深さ10cmを測る土壙である。

出土遺物には、肥前系陶器碗287、瀬戸美濃系陶器碗288、土師質皿289・290がある。18世紀前半である。

287は呉器手で黄白色の硬質胎土に灰釉を掛け、壘付無釉である。

288は灰白色の硬質胎土に鉄釉を掛け、口縁端部が短く外反、高台無釉である。289は底部外面は回転糸切り痕で、内外面に煤が付着する。

vi) 土壙 SK203 (図15・16、図版31・32)

遺構の新旧関係による切り合いのため規模は明確でないが、長径90cm (+α)、短径80cmの平面形が長方形を呈し、深さ20cmを測る土壙である。

出土遺物には、瀬戸美濃系陶器壺291、産地不明陶器壺308がある。19世紀代である。

291は黄白色の硬質胎土に灰釉を掛け、口縁端部無釉、体部内面と高台外面は無釉、肩部に橋状把手を貼り付ける。308は口縁端部を左右にわずかに拡張させ、体部上位にカキ目を施す。

vii) 土壙 SK204 (図15・16、図版9・31・32)

SK204は調査地外に広がり、一辺が1.2m (+α) の平面形が方形を呈し、瓦廐棄を主とする深さ40cmを測る土壙である。

出土遺物には、瀬戸美濃系磁器壺292・碗293、関西系磁器碗294・小坏296・297、肥前系磁器碗298・紅皿295・坏296・297、皿299～301、金属性製品302、加工円盤303～305、土製品306、土人形307、大谷焼壺309がある。19世紀代である。

292は色絵、293は端反の染付、294は染付で焼き継ぎ痕があり、高台内に透明と朱書きの記号がある。

295は外面に蛸唐草文の陽刻、外面無釉である。296～299は染付である。300は染付の輪花型打成形である。301は染付で見込みはコンニャク印判の五弁花文、高台内に1か所ハリ目跡がある。

302は銅製の釣り下げ用金具で、両面に打ち出し痕による文様がある。303～305は瓦素材で、305は「明」「石」の陰刻がある。306は土製の独楽、307は左右型合わせの馬である。

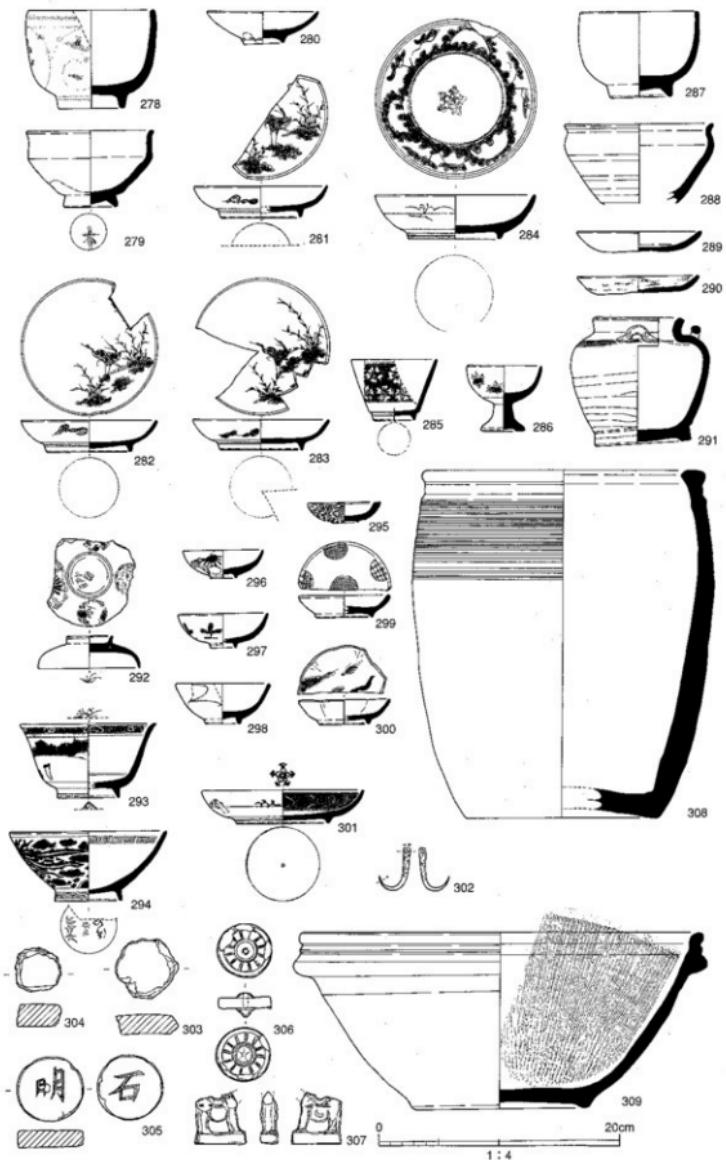


図16 土壌 SK201 (278~286)、SK202 (287~290)、SK203 (291・308)、SK204 (292~307)、
庭状遺構 SX202 (309) 出土遺物

vii) 土壌 SK205 (図15・17・18、図版9・34~37)

調査地南東隅で遺構の一部を検出している。一辺1.4m (+α) の平面形が方形を呈し、深さ70cmを測る。

出土遺物には、肥前系磁器碗310~314・321・蓋物315・鉢316・小壺317~320・香炉322・蓋323~328・皿329、京信楽系碗330・331・灯明受皿340、產地不明陶器碗332~335・土瓶351・瓶352、大谷燒甕353、備前灯明皿336~338・灯明受皿339、秉燭341、目皿342・343、ミニチュア土師質蓋345・播鉢346、加工円盤347~349、土人形350、堺明石系播鉢354がある。19世紀代である。

310は染付で「ハ」の字形高台、口縁部内面に四方櫛文、見込みは二重圓線内□福で疊付無釉である。311~314は染付の広東碗で、312・314の見込みは一重圓線内に「壽」字である。315は口縁端部無釉、316は染付で輪花型打成形である。317~319は白磁、320は染付、319・320は疊付に離れ砂が付着している。321は染付で、口縁部内面に四方櫛文、見込みは二重圓線内コンニャク印判の五弁花文である。322は青磁染付で蛇の目凹形高台、底部内面無釉である。323は文様構成が碗312と同じであることからセット物と考えれる。324は染付で、「ハ」の字形高台、口縁部内面に四方櫛文、見込みは二重圓線内に花文、325・326は染付で、見込みは一重圓線内「壽」字である。327・328は染付で、見込みは一重圓線内に抽象文である。

329は染付で、見込みはコンニャク印判の五弁花文、高台内は渦福である。

330は黄白色の硬質胎土に灰釉、高台無釉で、口縁部内外面に綠釉を合わせ掛けける。331は注連繩文碗で灰白色の硬質胎土に灰釉を掛け、高台無釉、注連繩は色絵で施されるが、ウラジロの緑色が消色している。332・334・335は灰色の硬質胎土で外面は灰釉を掛け鉄釉と白泥で文様を施し、口縁端部～内面は白泥を塗る。333は灰色の硬質胎土で、外面は灰釉を掛け鉄釉と綠釉と白泥の文様、口縁端部～内面は白泥を塗る。

337は内面に施釉、337・338は口縁部に灯芯油痕がある。339は仕切りに凹状の切り込みを入れる。340は灰白色的硬質胎土で内面に灰釉、外面無釉で仕切りに凹状の切り込みを入れる。341は灯芯用の突起に継ぎ切り込みを入れ、突起上端に灯芯油痕がある。

342・343は焜炉の通氣用の付属品である。

344は内外面に鉄釉、口縁部の3か所を波状口縁に変形、体部外面下位にカキ目、高台無釉、高台内と疊付に炭化物が付着している。

345は釜の蓋、346は播鉢で内面に摺目を入れる。347~349は瓦素材、350は前後型合わせの人物像で、底部に捺串の穴がある。

351は灰黄色の硬質胎土の内外面に鉄釉、蓋受けの口縁部端面と底部外面は無釉、体部外面にカキ目、底部には三足を貼り付け煤が付着、見込みにはハリ目跡が3か所ある。

352は鶴首の瓶で、外面に鉄釉、頸部～体部外面に白泥を掛け流し、底部外面無釉である。

353は褐色の硬質胎土の内外面に鉄釉、体部外面上位にカキ目、底部外面無釉、体部外面には肩部から鉄釉を掛け流す。

354は口縁部内面に幅広の凹線、摺目の上端はナデで消し揃えられ、見込みは放射状文様である。

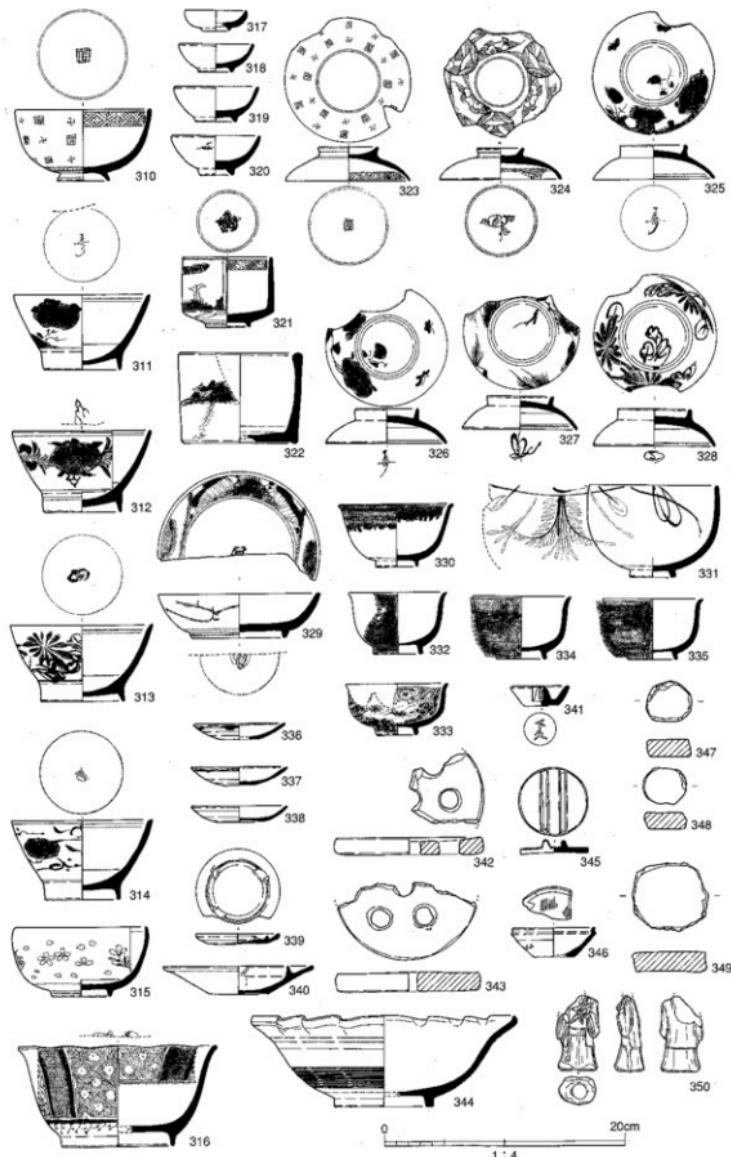


図17 土壌 SK205出土遺物

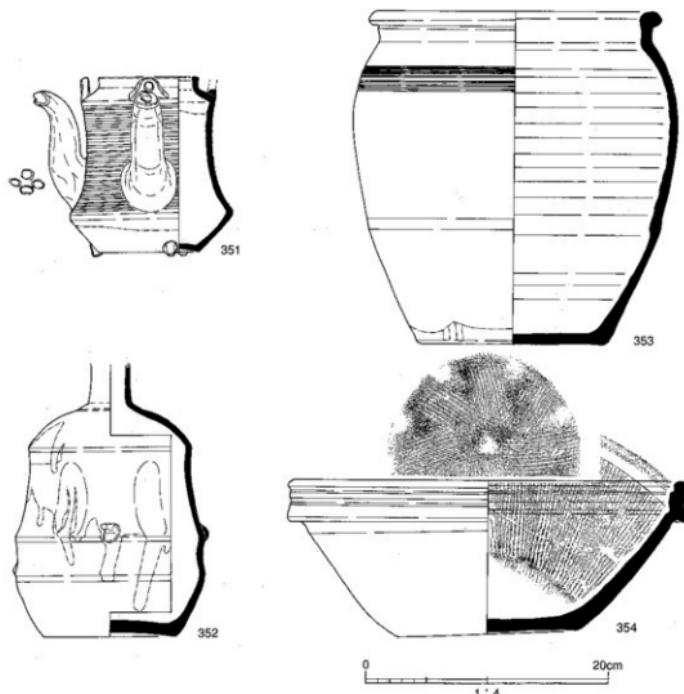


図18 土壌 SK205出土遺物

ix) 土壌 SK206 (図15・19、図版9・37・38)

長辺1.8m、短径1.2m (+α) の平面形が長方形を呈し、深さ20cmを測り、瓦・石を主体とする廃棄土壌である。

出土遺物には、肥前系磁器碗355・皿356・紅皿357・小壺358~361・壺364・蓋362、産地不明陶器蓋363、瀬戸美濃系磁器碗365、泥面子366、加工円盤367~370、堺明石系擂鉢371・372がある。19世紀代である。

355・356は染付、357は型押成形で外面に貝の放射脈を表現する。358・359は白磁、360・361は染付である。362は染付で、口縁部内面に簡素化した四方櫛文、見込みは一重圓線内に崩れた渦巻である。363は土瓶の蓋で灰色の硬質胎土で白土染付、内面は無釉で1か所ハリ目跡がある。

364は染付で底部外面無釉、365は色絵の口紅である。366は型押成形である。367~370は瓦素材である。371・372は口縁部内面に1条沈線、摺目の上端はナデにより消し揃えられ、見込みは放射状文様である。

x) 土壙 SK207 (図15・19、図版39)

径1mの平面形が不整円形を呈し、深さ40cmを測る土壙であり、溝SD201内で集中する遺構の一つである。

出土遺物には、肥前系磁器蓋物373・皿376、備前瓶374、產地不明陶器瓶375、皿377、土師質皿378・379、肥前系陶器甕380がある。18世紀前半である。

373は染付で、口縁部と疊付無釉である。374は体部外面にカキ目、火捺痕があり、底部外面に陰刻がある。375は黄褐色の硬質胎土で外面に鉄釉、内面に掛け流し痕があり、高台無釉である。

376は染付で見込みはコンニャク印判の五弁花文、高台内に1か所ハリ目跡がある。377は淡黄色の硬質胎土で口縁部は屈曲し、見込みは蛇の目釉剥ぎで釉剥ぎ部に褐色釉を塗り、高台無釉である。378・379は底部外面は回転糸切り痕である。

380は褐色の硬質胎土で口縁部を左右に拡張し内外面に鉄釉を掛け、体部外面と口縁部上面には白泥の象嵌を施し、疊付無釉で高台外側の設置面を斜めにカットする。

xi) 土壙 SK208 (図15)

溝SD201の南側に近接して位置し、調査地外に広がる土壙であるが、断面土層から平面形が径3m (+α) の円形掘形を呈する井戸の可能性がある。SD201の延長線上に造られていることから、屋敷界に対する厳密な意識があるとは言い難い遺構配置である。

xii) 整地落込 SX201 (図15・19、図版40)

SD201の西側の屋敷地において検出した落ち込みである。屋敷内での盛土が、屋敷表において島状に施された際にできる屋敷裏側への地形の落ち込みでSD201・202とつながる。島状盛土による高まりの周辺が低下している箇所については、屋敷の拡張に伴い平坦化されるが、島状盛土と同質の土砂を使用する場合とSX201のように異質の土砂を使用する場合がある。また、時間的にも連続性と非連続性が考えられる。

出土遺物には、肥前系磁器坏381・小坏382、土師質皿383～385、備前灯明受皿386、加工円盤387～396がある。18世紀代である。

381は白磁、382は染付、383～385は底部外面に回転糸切り痕と竜の子状压痕がある。386は底部外面は回転糸切り痕、仕切りに凹条の切り込みを入れる。

387～390は土師質の土器片を素材とし、391～396は瓦素材である。

xiii) 庭状遺構 SX202 (図15・16、図版7・33)

石積基壇 SN202～204の南側において平瓦・石・擂鉢を埋設した空間で、屋敷内における設置場所及び設置状況より裏庭の一部と考えられる。平瓦は1枚もしくは複数枚を立てた状態で連続埋設し、石列や備前擂鉢309と組み合わせる。18世紀後半である。

擂鉢309は口縁部内面に凸帯がめぐり低高台をもち、擂目は底部中央まで連続して下ろす。

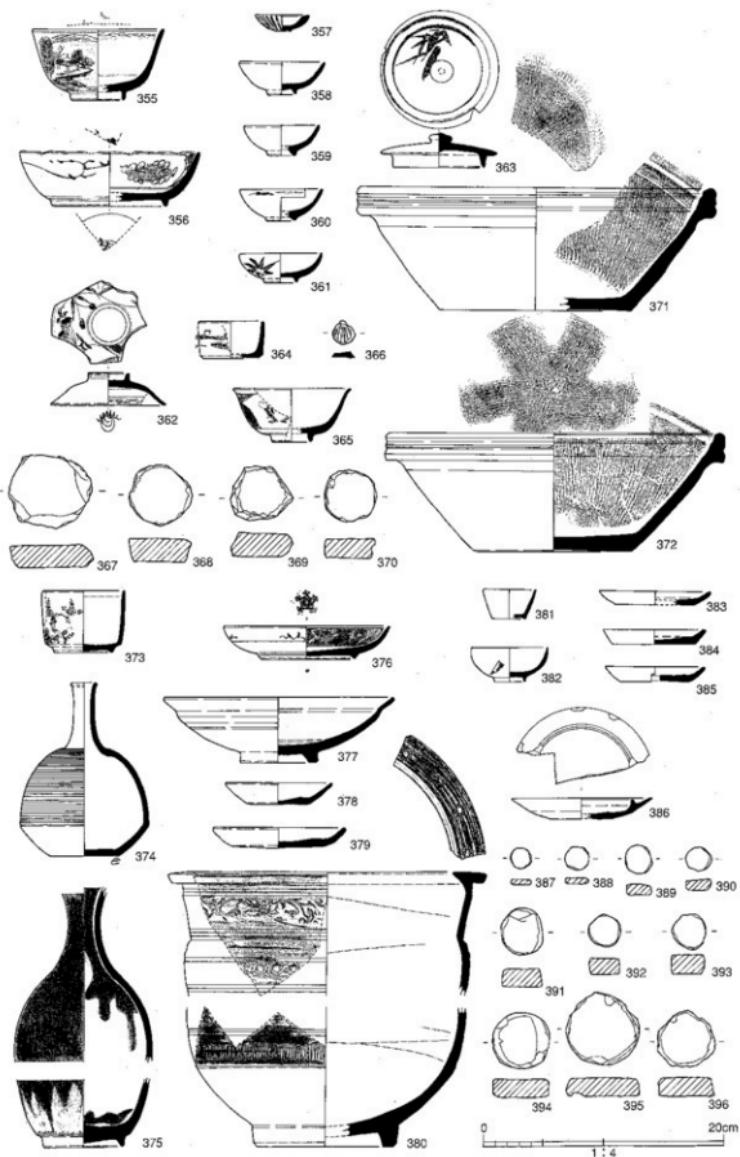


図19 土壌SK206 (355~372)、SK207 (373~380)、整地落込SX201 (381~396) 出土遺物

(3) III区の調査（図20、図版11・13）

① 基本層序

III区の現地表面の標高はT.P.+1.4mを測り、現代盛土・攢乱土（0層）下に第1～5層が堆積する。第1～4層は屋敷の整地に伴う盛土であるが、石積基壇SN301の東側では盛土内にシルトを挟在させる整地がみられる。第5層が遺構検出ベース層である。

② 遺構と遺物

i) 土壙 SK301（図20～22、図版40～44）

長径1.5m、短径1.1mの平面形が長円形を呈し、深さ50cmを測る土壙である。

出土遺物には肥前系磁器碗397～399・蓋物401・鉢402・皿403・蓋404・409・段重405・小坏406～408、京信楽系蓋410・皿418、瀬戸美濃系磁器碗411～414、輸入磁器415、土師質皿417、泥面子419～422、陶器人形423、火打ち石（写真図版：424～429）、漆器椀430・皿431、漆製品432・433・439・440・441、櫛434・435、木簡436～438、杓子442・443、傘444・445、下駄446～451がある。19世紀代である。

397は染付で、焼き継ぎ痕があり高台内に透明書きの記号がある。

398～401は染付で、399は口縁部内面に簡素化した四方捺文、見込みは二重圈線内に「善」字で、4か所のハリ目跡がある。400は染付の広東碗である。

401は口縁端部無釉で、焼き継ぎ痕があり、高台内に透明書きの記号がある。

402は染付の輪花型打成形で、口縁部内面に四方捺文である。403・404は染付である。405は染付で、口縁端部無釉、焼き継ぎ痕がある。

406～408は染付、409は染付の合子の蓋、409は土瓶の蓋で、淡黄色の硬質胎土で外面白土に三彩、内面に「寶山」の刻銘がある。

411～414は端反の染付、415はヨーロッパ磁器で、高台内の人物像の上に「CLEAMER」、下に「PE TRUS. RECOLUT.」、人物像には「MAASTRICHT」とある。

416は灰色の硬質胎土で内外面に灰釉、高台無釉である。417は底部外面は回転糸切り痕である。

418は内面に灰釉、3か所のハリ目跡があり、外面無釉で口縁部外面に灯芯油痕がある。

419～422は型押成形、423は鼠で底部に穴がある。424～429はチャートである。

430は内外面に赤色漆、431は内外面に黒色漆である。432・433は漆箱の蓋で、内外面に黒色漆で雲形の装飾が施されている。

434・435は平面形が梢円形を呈する楕で、435は黒色漆に金蒔絵を施す。436・437は四国遍路に使用するはさみ禮で、436は「梵字 奉納四国八拾八箇所遍路同行二人」、437は「梵字 南無大師遍照金剛」である。438は木筒であるが判読できない。439は、漆製品で表面に十二支の刻銘を環状に配する。440・441は漆製品の箱蓋で、440は内外面は黒色漆、441は外面は赤色漆、内面は黒色漆である。444は和傘の頭口クロ部である。446は割り下駄、447は角型の連歎下駄、448は無眼下駄、449・450は丸型の連歎下駄、451は丸型の陰卯下駄である。

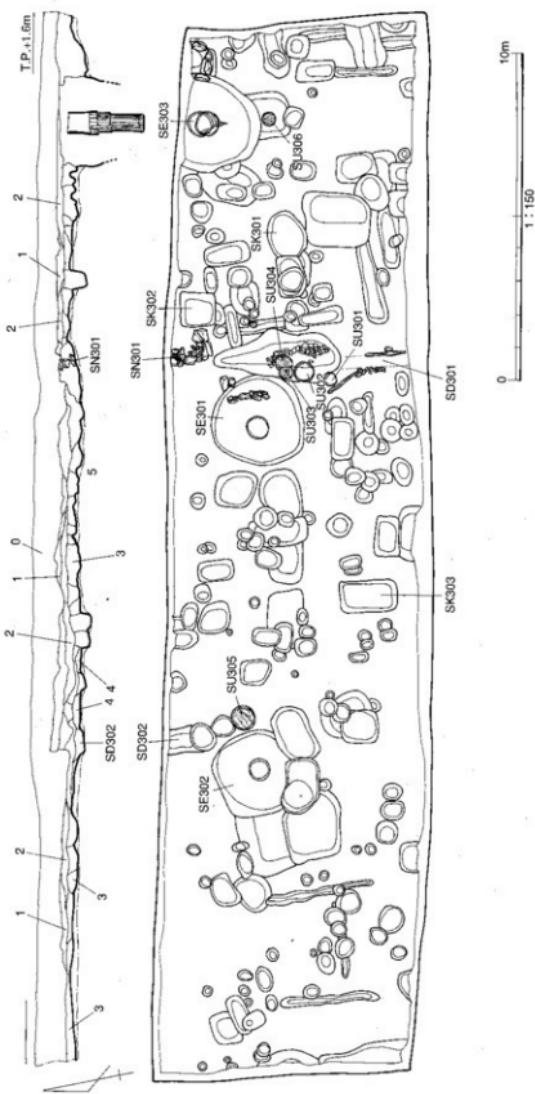


図20 Ⅲ区構成配置図・断面土層図

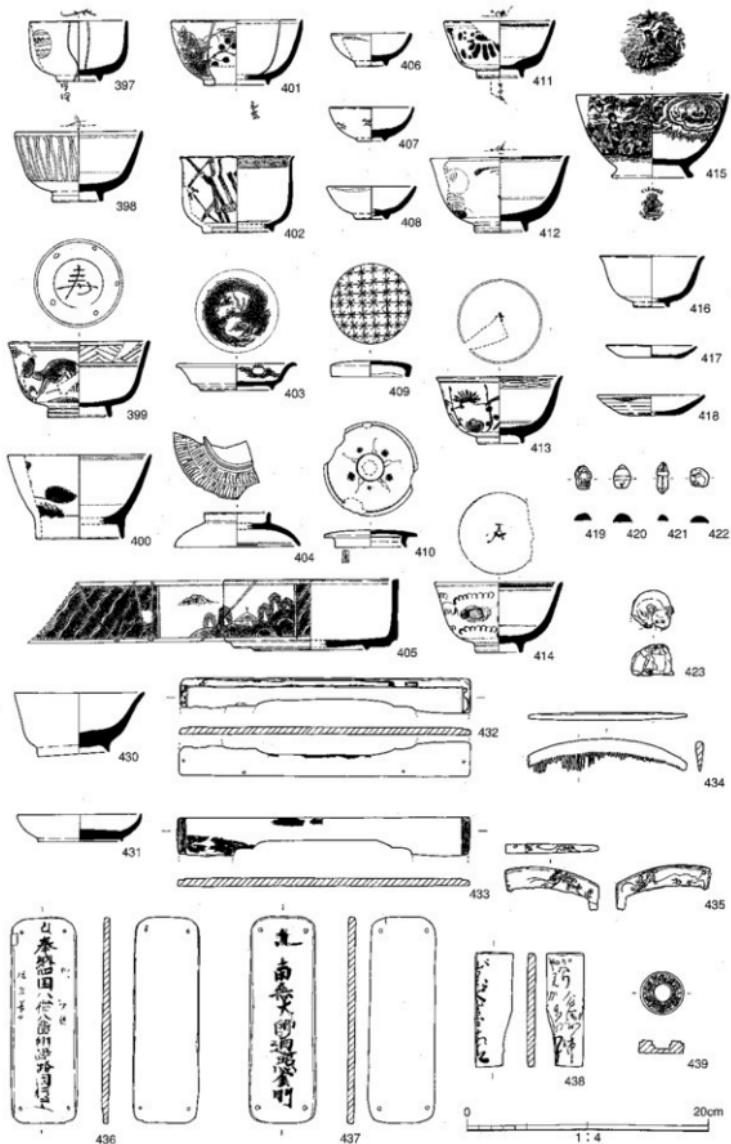


図21 土壙 SK301出土遺物

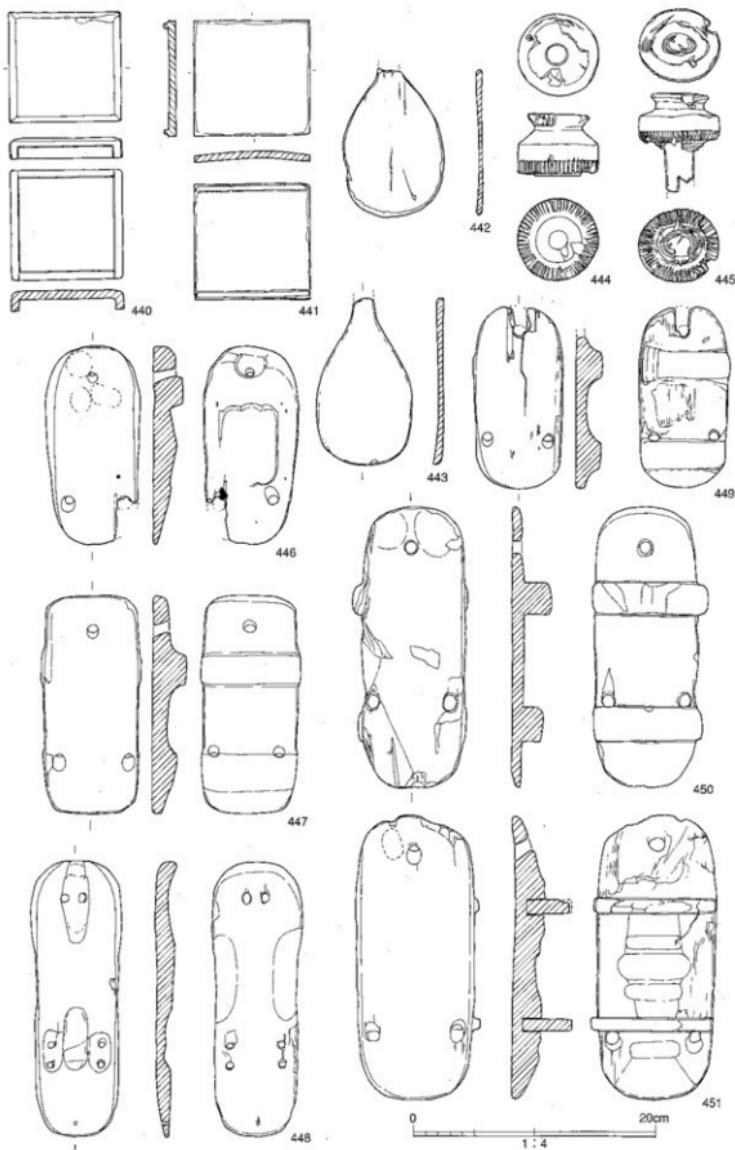


図22 土壌SK301出土遺物

ii) 土壙 SK302 (図20・23、図版45)

一辺1.1mの平面形が方形を呈し、深さ40cmを測る土壙である。

出土遺物には、関西系磁器碗452、肥前系磁器碗453・坏455・仏飯器456、肥前系陶器碗454、土製品457・458、泥面子459～464がある。19世紀代である。

452は染付である。453は染付で口縁部内面は四方櫛文、輪花型打成形で見込みは二重圓線内五弁花文である。454は外面は白泥の刷毛目文、内面は打刷毛で豊付無袖である。455・456は染付で、456は底部外面無袖、457は箱庭道具、458は左右型合わせの鳩笛、459～464は型押成形である。

iii) 土壙 SK303 (図20・23、図版45)

長辺1.7m、短辺90cmの平面形が長方形を呈し、深さ30cmを測る土壙である。

出土遺物には、肥前系磁器皿465・466・蓋物467、秉燭468、瓦質土瓶469、土製品470、加工円盤471～473がある。19世紀代である。

465は染付で輪花型打成形、口縁で豊付無袖である。466は染付、467は染付で口縁部及び底部外面無袖である。468は灯芯用の突起に縦に切り込みを入れる。469は体部外面は型押成形、外面には炭化物が付着している。470は型合わせの箱庭道具の灯籠である。471～473は瓦素材である。

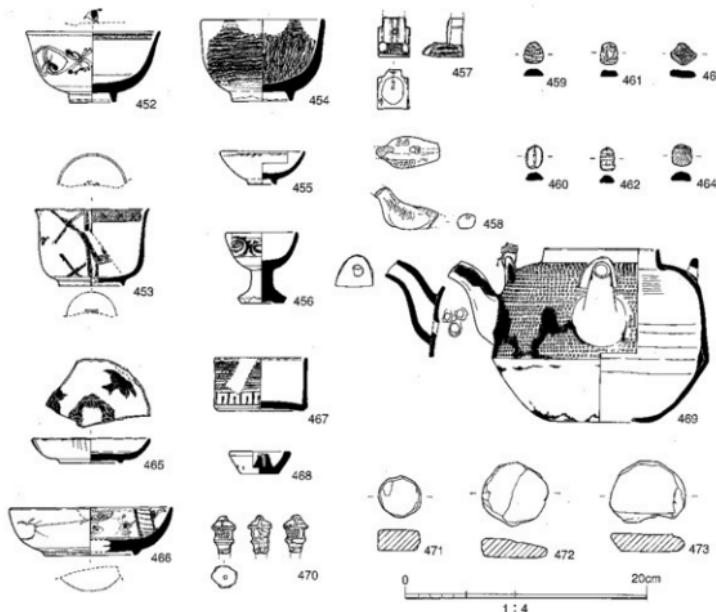


図23 土壙 SK302 (452～464)、SK303 (465～473) 出土遺物

iv) 井戸 SE301~303

SE301~303はほぼ等間に位置することから、これらの井戸は鉄炮組の各屋敷に置かれた井戸の可能性がある。さらに、井戸の周囲には木桶の底板が確認されていることから、井戸と木桶がセットとなる水場が各屋敷裏に設けられたと考えられる。

a) 井戸 SE301 (図20・24、図版12・46)

SE301は径2.8mを測る平面形が不整円形を呈する掘形のほぼ中央部に径70cmの桶積み上げの井戸側で、周辺には桶底板 (SU301~304) がある。また、井戸側に細竹を突き刺した状況がみられ、井戸埋め戻し時の祭祀行為と考えられる。

出土遺物には、井戸掘形から肥前系磁器蓋474、京信楽系碗475、灰落し476、備前灯明受皿478、井戸側から產地不明陶器皿477がある。18世紀後半である。

474は染付、475は灰白色の硬質胎土に灰釉を掛け、高台無釉である。476は黄橙色の硬質胎土で型打成形、外面は灰釉に鉄絵、底部外面と内面は無釉である。

477は褐色の硬質胎土の内面に灰釉、外面無釉、見込みに3か所のハリ目跡、底部外面に3か所の目跡、口縁部に灯芯油痕がある。478は仕切りに凹条の切り込みを入れる。

b) 井戸 SE302 (図20・24、図版12・46・47)

SE302は径2.5mの平面形が円形を呈し、径70cmの桶積み上げの井戸側をもつ。東に桶底板 (SU305) がある。

出土遺物には、掘形から肥前系磁器碗487・皿488、京信楽系碗489、產地不明陶器蓋490、大谷焼壺491、加工円盤492、焙烙493、井戸側から堺明石系擂鉢494がある。19世紀代である。

487は染付で、高台内「大明萬曆年製」銘、488の見込みは蛇の目釉剥ぎである。

489は鉄絵の注連縄文である。490は灰色の硬質胎土の外面に灰釉、天井部に円形窓を2か所孔け、内面無釉である。491は内外面に鉄釉、底部外面は無釉で回転糸切り痕である。

492は瓦素材で、片面中央に凹部、片面にケズリ痕を弧状に施す。493は底部から内傾する口縁部である。494は口縁部内面に1条沈線、眉目はナデで消し揃えられ見込みは放射状文様である。

c) 井戸 SE303 (図20・24、図版14・15・46)

SE303は調査地外に広がる井戸で、調査地内において径2.9mの平面形が半円形を呈し、径70cmの井戸側をもつ。井戸側は下位2段が桶積み上げ、その上に1段の瓦積みが残存し、上位には後世の改修による陶器の土管が積まれている。桶積み上げ十瓦積みの井戸側内に細竹を突き刺した状況がみられることから、井戸改修時の祭祀行為と考えられる。

出土遺物には、肥前系磁器小壺479・碗480、京信楽系碗481、備前灯明受皿482・483、泥面子484、土人形485、焙烙486がある。18世紀後半である。

479は染付、480は青磁染付で、口縁部内面に四方標文である。481は色絵+鉄絵の注連縄文碗である。482・483は仕切りに凹状の切り込みを入れる。

484は型押成形、485は前後型合わせで、底部に串用の穴がある。486は底部から直立する口縁部である。

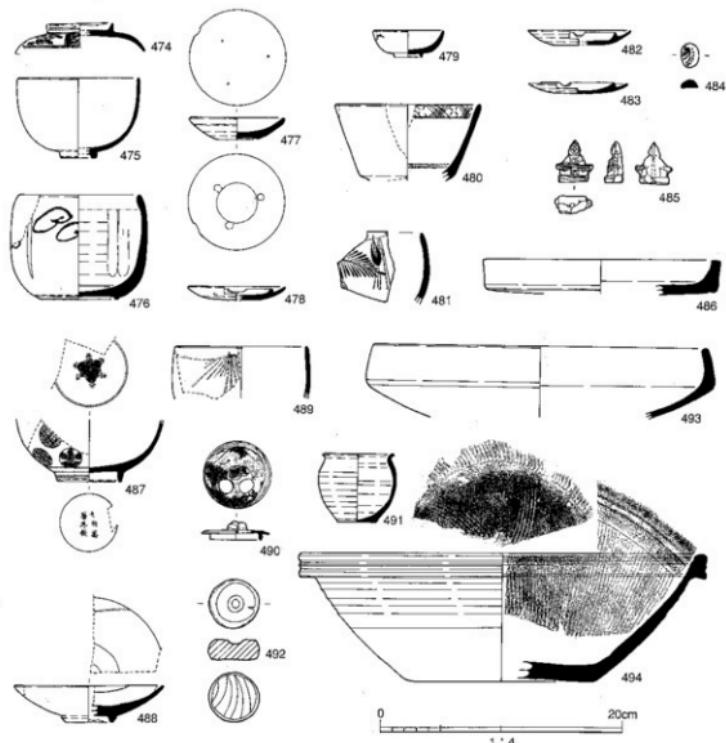


図24 井戸 SE301 (474~478)、SE302 (487~494)、SE303 (479~486) 出土遺物

v) 溝 SD301 (図20・25・26、図版11・47~50)

残存状況は良好でないが、井戸 SE301の掘形上に位置する石組溝～木桶+集石部～板組溝へ繋がり、SE301に伴う水利施設と考えられる木桶を取り込んでいることから、排水溝の可能性がある。溝 SD301以外には明確な屋敷界を意識する溝はみられないが、SE202の南側では水の還元作用を受けた土質・土色の変化がみられることから、屋敷裏に置かれた井戸の周辺には、SD301と同じような機能を有する溝が本来存在していたのかもしれない。

出土遺物には、肥前系磁器碗495~499・501~503・507・514、皿504~506・蓋508~510・小壺511~513・御神酒德利515・仏飯器516・517、肥前系陶器碗500・鉢518、瀬戸美濃系磁器碗519・520、蓋523・524、関西系磁器碗521、瀬戸美濃系陶器碗522・皿526、産地不明陶器蓋525、大谷焼灯明具527・鉢528・擂鉢538、石製品529・530、加工円盤531~534、泥面子535・536、金属製品536、瓦質七輪537がある。19世紀代である。

495は染付で疊付無釉、496～498は染付で、497・498は見込みに重ね焼きの痕跡がある。

499は染付で、口縁部内面に四方擗文、見込みは二重圓線内コンニャク印判の五弁花文である。

500は陶胎染付で、口縁部外面に四方擗文、501～503は青磁染付、503は朝顔形碗で、口縁部内面に四方擗文、高台内に二重枠内渦福、502・503は見込みに二重圓線内手描き五弁花文である。

504は染付で、見込みは重ね焼きの痕跡があり、離れ砂が付着している。

505は染付の輪花型打成形、見込みは二重圓線内手描き五弁花文で、高台内は二重枠内の渦福である。506は染付で、見込みは二重圓線内コンニャク印判の五弁花文、高台内渦福である。

507は青磁染付で、口縁部内面に四方擗文、疊付無釉で離れ砂が付着している。508は染付で「ハ」の字形高台、口縁部内面に四方擗文である。

509は青磁染付で、口縁部内面に四方擗文、見込みは二重圓線内手描き五弁花文、高台内二重渦福である。

510は染付の蓋物の蓋で、口縁部内面無釉である。

511は染付、512・513は白磁である。514は青磁に鉄絵、口鏽、高台無釉である。

515は染付、516・517は底部外面無釉である。

518は三島手で、体部外面は下半に鉄釉、上半に灰釉、内面は白泥の象嵌を施し、見込みに4か所の目跡がある。

519～521は染付、522は黒漆釉に長石釉を散らばした拳骨茶碗で、高台内施釉、疊付無釉である。

523・524は染付、525は土瓶の蓋で、外面に鉄釉、内面無釉である。

526は外面に白泥の刷毛目、527は外面鉄釉、528は高台無釉である。

529は側面に執りを入れ両先端には敲打痕がある。530は砥石で溝状痕がある。

531～534は瓦素材である。535・536は型押成形である。

537は外側は粘土板成形で方形に仕上げる。両側に松毬状の把手を貼り付け、外側に陰刻の菊花文を型押している。外面はヘラミガキ、内面には粗いハケが施される。上面四隅に貫通する小孔を穿ち、「長左衛門」の刻銘がある。

538は褐色の硬質胎土で外面に鉄釉、内面と底部外面は無釉、見込みは放射状文様である。

vi) 溝 SD302 (図20)

幅80cm、深さ20cmを測る南北方向の溝で、近接して井戸 SE302・木桶底板 SU305があることから、SD301と同様に排水溝の可能性がある。

vii) 石積基壇 SN301 (図20)

III区のはば中央部で石積の一部を検出し、調査地外へ広がる石積基壇の一部と考えられ、L字型を呈し1～2段が残存する。石材は結晶片岩である。II区の石積基壇 SN201～206と同形態であり、調査地の北側に屋敷の建物の存在が想定されることから、III区のはば全域が鉄炮組の屋敷裏に該当すると考えられる。

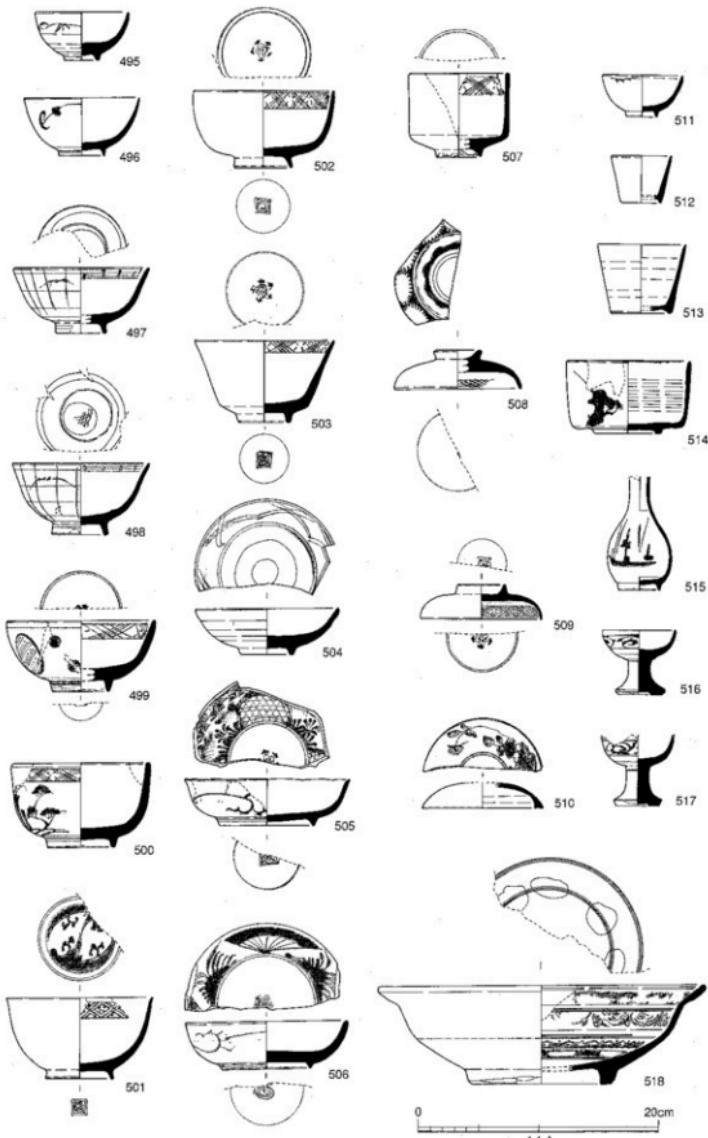


図25 满 SD301出土遺物

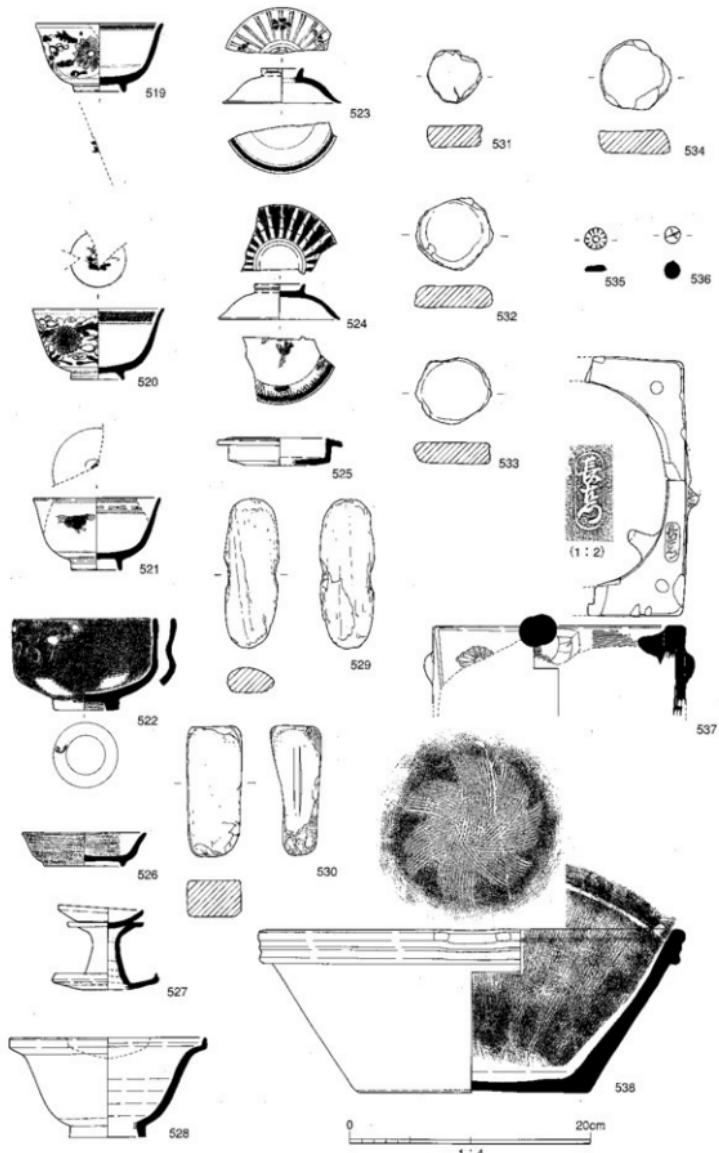


図26 淸 SD301出土遺物

4 小結

I～III区は住人不明の「建屋」、小卒の「御掃除」屋敷、林弥五右衛門組の「鉄炮之者」屋敷の一画である。

I区で確認された溝 SD104・105は出土遺物から18世紀代の屋敷界溝と考えられ、両溝は小規模な1条溝である。調査地の北側に位置する徳島中学校内での発掘調査¹⁰において確認された屋敷界溝は1条形態であり、徳島城下町・前川においては屋敷界溝は1条が通常形態なのかもしれない。ただ溝の規模においては大差があり、二重の土手の内側で城下町の建設当初に造られ、17世紀代に埋没する大規模な1条の屋敷界溝と17世紀中葉以降に宅地化が進んだ内側土手の外側の地域で採用された屋敷界溝の規模の差は、時期差から生ずる溝本来の性格差に起因するものであろう。

II区は「鉄炮之者」の屋敷にあたり、鉄炮組の屋敷は佐古屋敷や富田屋敷のように短冊型に区画割りされていたものと考えられる。前川については絵図から屋敷割りの形態を知ることはできないが、調査では屋敷内における整地方法や鉄炮屋敷の区画割りに関する情報を得ている。

屋敷の整地は、まず、道路に面した屋敷表の間口側に島状の高まりを造るための盛土が施され、さらに屋敷基壇となる石積（SN201～206）が設置される。この屋敷表で行われる盛土には主に良質のシルトが使用され、しかもシルトと砂を互層に敷き版築のように固く敲き締められる。この時、島状の高まりとその周囲では高低差が生じるが、建物の拡張に伴い島状の高まりをさらに拡大させる場合（SN205・206）と段差が生じた屋敷裏に異なる土質の土砂で屋敷地を平坦化する（SX202）場合が考えられる。また、屋敷裏の整地に關しても島状の高まりを造出後、連続して行う場合と時期差を経て行う場合など、各屋敷における整地の在り方は複雑であり、また個別性の強いものと考えられる。

いずれにせよ、屋敷内における島状盛土を行うことと整地に伴う土砂の使い分けは、すでに城下町・前川において知られている¹⁰ことから、この地域にとって屋敷地造成の通常的な在り方である。今後、徳島城下町跡における前川以外の地域との対比が必要である。

この盛土による整地は、徳島城下町跡で普遍的にみられる屋敷界溝と少なからず関係をもっている。屋敷界溝は絵図に描かれた屋敷間の界線との照合で認識されているが、城下町絵図の中では鉄炮組屋敷は一区画として記載され、個別の屋敷割りについては界線が引かれていません。ただ、鉄炮組の佐古屋敷や富田屋敷を個別に描いた絵図には、屋敷の区画割りが明瞭な界線で示されていることから、屋敷界溝の存在を暗示させる。

この視点に立てば、II区の溝 SD201・202は屋敷を区画する屋敷界溝として理解できるが、これらの遺構は掘削を伴うものではなく、巣密には各屋敷で行われた島状盛土の行為により生じた高低差による溝状の凹地である。この溝状の凹地は屋敷裏では不明瞭であり、屋敷間を明瞭に区画して連続性をもつものとは言い難い。また、SD201には土壤状の遺構が集中し、溝としての機能・意識がみられず、鉄炮組の屋敷間でみられる溝状の凹地と城下町跡特有の屋敷界溝とは区別すべきであろう。

鉄炮組の佐古屋敷では、「各組屋敷は間口5間、奥行15間、75坪の屋敷に統一された」との指摘¹¹

があり、1間=1.96mとした場合、Ⅱ区のSD201の西側の屋敷地は島状盛土を施した間口が9.6mを測ることから、佐古屋敷の各組屋敷と概ね同じ数値である。

Ⅲ区は「鉄炮組」屋敷の裏に該当することから、Ⅰ区でみられたような島状盛土の痕跡ではなく、屋敷間口の間数については明確ではない。ただ、井戸SE301～303の配置間隔が9.6～10.4mを測り、Ⅱ区で確認された井戸と想定されるSK208が屋敷界に設置されるのと同じように、屋敷界付近に井戸1基の配置を前提とするなら、屋敷間口は5間で統一されていたものと考えられる。井戸SE301・302の位置と現在の土地境界ラインが一致する（図版11・13）ことは、江戸時代の鉄炮組の屋敷割りの一部が今まで継承されているのかもしれない。

(註)

- (1) 德島城博物館『徳島城下とその周辺』、2001年。
- (2) 徳島市教育委員会『徳島市埋蔵文化財発掘調査概要17』、2007年。
- (3) (2)と同じ
- (4) (1)と同じ

写 真 図 版



上層検出遺構

(東から)



下層検出遺構

(東から)

溝 SD01 (南から)



溝 SD02 (南から)



溝 SD03 (南から)





石積 SN01 (南から)



石積 SN01 (西から)



下層遺構検出状況
(西から)



下層検出遺構 (東から)



堆積土層 (南東から)



石積 SN01除去後杭
(西から)